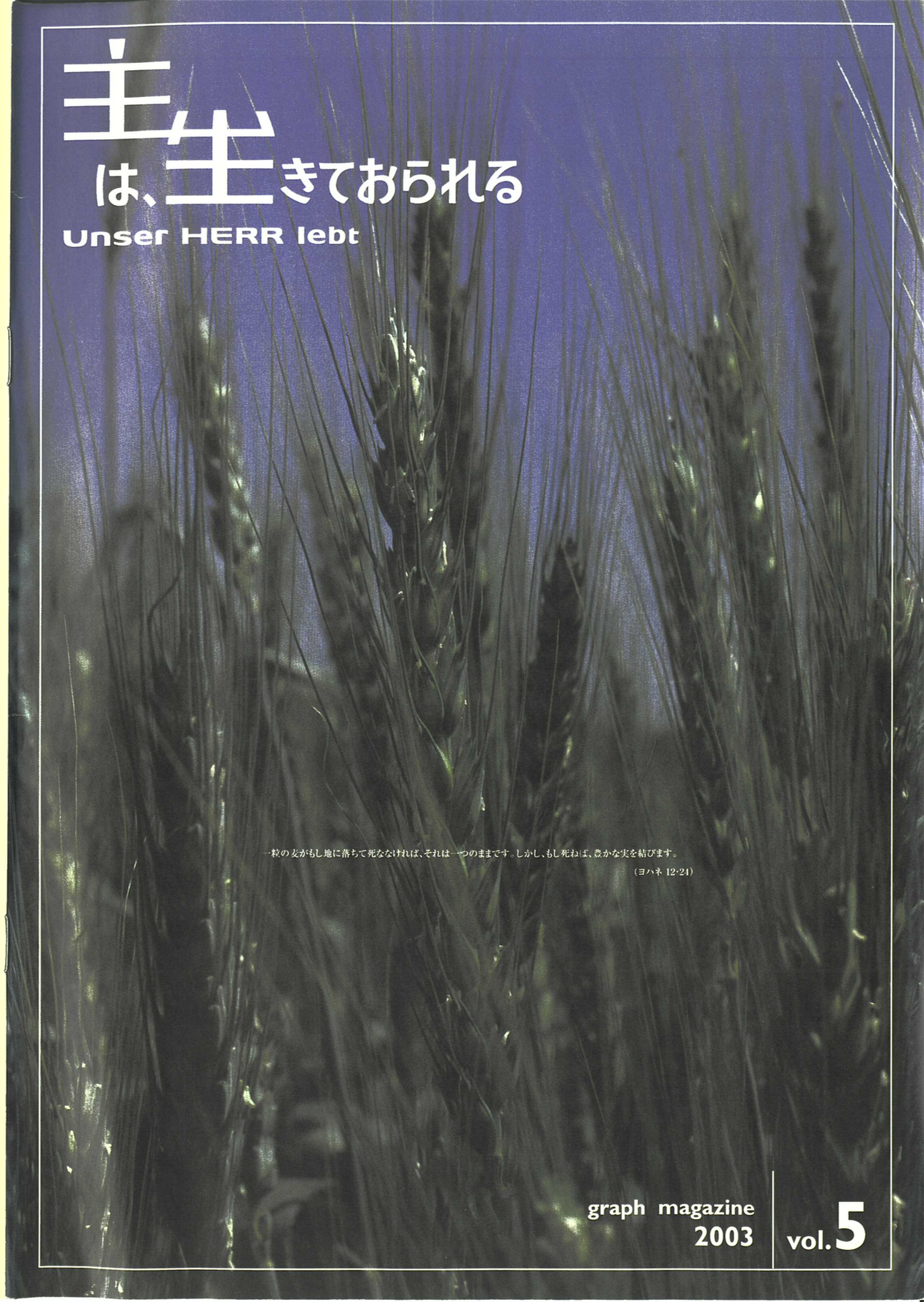
Unser HERR lebt

主生 vol.5 | 定価150円(本体143円)

主は、生きておられる

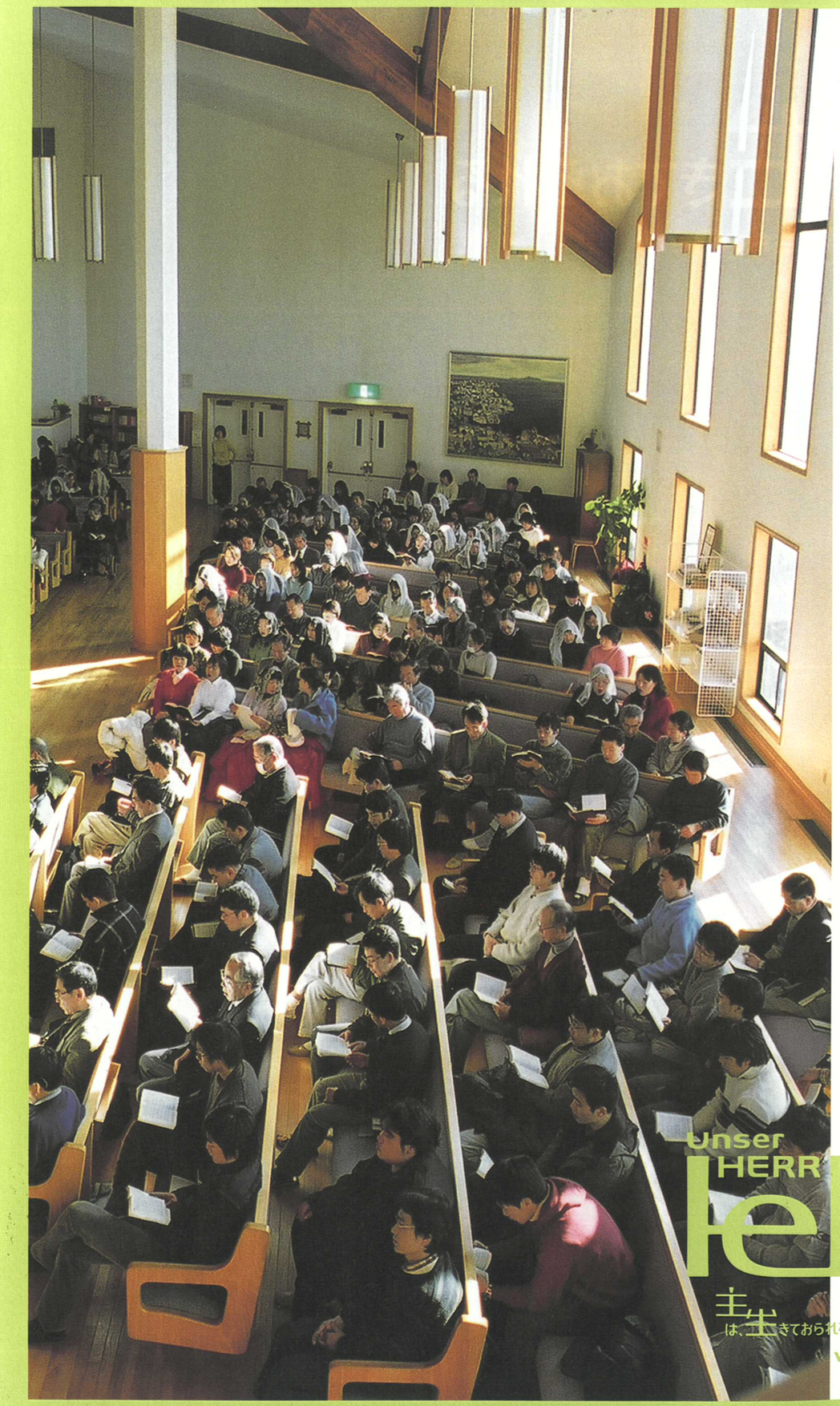
Unser HERR lebt



一粒の麦がもし地に落ちて死なないれば、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。

(ヨハネ 12:24)

graph magazine 2003 vol.5



unser HERR lebt

主は、生きておられる

vol. 5

INDEX

04 巻頭メッセージ
暗やみから光へ　ゴットホルド・ベック

08 キャンプ報告
祝福された「ワシントンDCよろこびの集い」

10 特集 死は決して終わりではない

4人のメッセージ

20 信仰の確信について　蘇畑 卓郎

24 「生きよ」　岡本 雅文

28 聖書の中には特効薬がいっぱいあります。　中込 豊

30 喜んでいますか？　重田 洋

32 連載メッセージ 第5回 ［モーセの十戒］
神の聖なる戒め　ゴットホルド・ベック

38 2003年 4月～9月 ［メッセージ当番表］
本誌に関するアンケート

2人の証し

42 今日も生かされて主を証しする喜び　国川 雅子／憲 三

44 苦しみにあったことは、しあわせでした。　斉藤 泰子

子どもたちとの触れ合いから

46 あおぞらひろば ― いまそこにある危機

各地の集会から

48 こちら沖縄集会で～す

49 結婚・葬儀の報告

50 桃のシュトロイセル・クーヘン

52 本の紹介／キリスト集会へのご案内

54 全国の集会住所録



暗やみから光へ　ゴットホルド・ベック

神である主、常にいまし、昔いまし、後に来られる方、万物の支配者がこう言われる。「わたしはアルファであり、オメガである。」（黙示 1・8）

「しかり。わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。（黙示 22・20）

「あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」（ヨハネ 16・33）

世界中が、大きな渦に巻き込まれて、どんどん不気味な方向に流されていきます。一体どうなるのか、どこへ向かっているのか、誰にもわかりません。ただ、とてつもなく大きなことが起こっていることだけはたしかです。それは一体何なのでしょうか。状態はもっとひどくなるのでしょうか。次には何が起こるのでしょうか。こういった不安が多くの人々の上に重苦しくのしかかり、苦しめています。「私たちはどうなるのか？」この質問に答えられるのは誰でしょうか。人々は、自分の頭でこの謎を解こうとします。しかしその結果は、的外れに終わります。多くの人々は、占いやお告げの類に頼り、それと知らずに自分の将来を悪魔に尋ねています。その結果、魔術や魔力に捉えられてしまいます。では一体、私たちは誰に尋ねればいいのでしょうか？

私たちの未来について、ただ一つ、権威を持って示すことができるのは聖書だけです。聖書は、まことの神の啓示によって書かれた書です。主イエス様は次のように語っておられます。

「この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。」（マタイ 24・35）

「天地が滅びうせない限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます。」（マタイ 5・18）

聖書の言葉は、一言一句にいたるまで、決してすたれることはない、とイエス様は言っておられます。聖書に書いてあることはすべて真実であり、真理です。もし人が天地を創造した神の言葉を信じないなら、一体何を信じればいいのでしょうか。神の言葉を信じないことは、主に対する罪です。もし、まことの神が示された聖書に書かれてあることが真実でないと思うなら、その人は「神以上の権威を持っている」と思い上がっているのです。しかし、主に感謝しましょう。なぜなら、主の言葉である聖書に疑いをはさみ、聖書の権威を否定しようとした人々は、未だかつて決して成功したことがないからです。

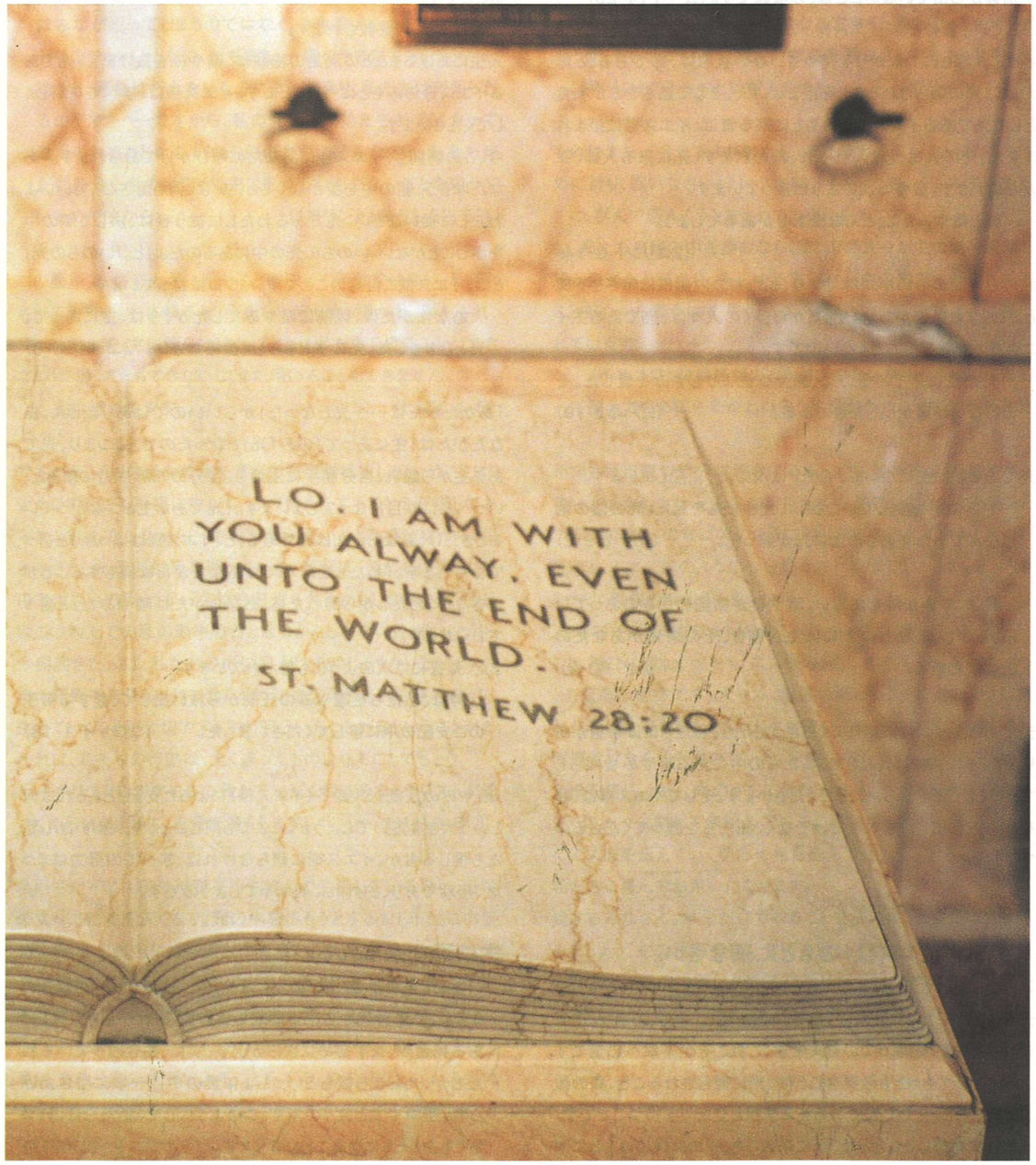
聖書を完全な真理の書として信じている人々だけが、聖書を否定する人々に対して、主の言葉と権威をもって立ち向かうことができ、常に勝利をえることができます。聖書が示す未来を、確信をもって受け取ることができます。では聖書は、未来をどのように啓示しているのでしょうか。

二千年前に、イエス様は人の姿をとってこの地上に、私たちの救いのために来られました。そして近い将来、そのイエス様は再びおいでになります。それはもはや人々を救うためではなく、イエス様を受け入れ、信じ従う者たちを、天の御國に迎え入れるためです。

「わたしは光として世に来ました。わたしを信じる者が、だれもやみの中にとどまることのないためです。」（ヨハネ 12・46）

イエス様は、光そのものです。イエス様は、世の中の多くの人々が誤解しているように、いわゆる宗教家や教祖ではありません。ただ、光そのものなのです。イエス様は、昨日も今日も、いつまでも、愛と平和と希望と慰めの光です。イエス様を光として知るようになる者は、誰でもその人の人生がすべて新しくなります。現代の人々は暗やみの中に生きています。つまり、なぜ自分がこの地上に存在しているかを知らず、自分たちの人生の意味を知らず、死後にどこへ行くかを知りません。そしてこれらを知らない者は、暗やみの中で手探りするような人生を過ごしているのです。主のみことばの光を通してのみ、私たちは本当はどのような者であるかを認識することができます。それについての主なる神の判断は次のようなものです。

「義人はいない。ひとりもいない。……善を行なう人はいない。ひとりもいない。」（ローマ3・10、12）



信仰から出ていないことは、みな罪です。(ローマ14・23)

ここでいう信仰とは、イエス様とのつながりを意味します。ですからイエス様とのつながりを持っていない状態は、罪である、と言えます。光に照らされることを拒まない人、そして過ちをおかす者として光であるイエス様のみもとに来る者は、イエス様に拒まれません。その人は受け入れられ、救われます。光に来る人は、罪から離れます。聖書は次のように言っています。

光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。(2コリント 6・14)

私たち人間の心の中は闇であり、私たちの内側には暗さと不純とよこしまと偽善があります。だから多くの人々は、光である主イエス様と関係を持ちたくないのです。

光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行ないが悪かったからである。(ヨハネ3・19)

光である救い主について、イザヤは次のように記しています。

やみの中を歩んでいた民は、大きな光を見た。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が照った。(イザヤ 9・2)

見よ。やみが地をおおい、暗やみが諸国の民をおおっている。しかし、あなたの上には主が輝き、その栄光があなたの上に現われる。(イザヤ 60・2)

光である主イエス様が来てくださったから、私たちには希望があります。イエス様は光として、私たちの中にある暗やみを照らしてくださり、罪を明らかにしてくださいます。そしてイエス様は、罪を明るみに出し赦されるだけでなく、私たちを救ってくださるのです!

「わたし(イエス様)のもとに来なさい。わたしは光です。」

光のもとに来たくない人は、自分の罪を隠したい人であり、正直になりたくないと思っている人です。これこそが不幸への道です。人間にとってもっとも必要なことは、光に照らされること、罪の赦しを得ること、そして光であるイエス様と交わりを持つことです。イエス様を信じることとは、光に来ること、イエス様のみもとに来ることです。そして、イエス様のみもとに来る者は、間違いなく受け入れられ、罪を赦されます。

人生におけるまことの満足の秘訣は、暗やみを抜け出し、光であるイエス様のみもとに行くことです。イエス様は、すべてを新しくしてくださいます。

今、この瞬間も、イエス様はあなたに呼びかけておられます。「あなたはもう、闇の中を歩かなくてもいいよ。何も隠さなくていいよ。わたしに従いなさい。光であるわたしに従う者は、決して闇の中を歩むことがない。いのちの光の中にあるのだよ」と。「いのちの光」とは、イエス様ご自身のことです。パウロは言っています。

あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。(エペソ 5・8)

「あなたがたは……光となった」からいいのではありません。あなたがたは「主にあって」のみ「光」となったのです。つまり、光である主から離れ、自分勝手に生活し、自分の知恵や力に頼ると、いっぺんに駄目になってしまいます。「光である主とつながっているときだけ、あなたがたは光である」と、イエス様ははっきりと言っておられます。「わたしを離れてはあなたがたは何もすることができない。わたしから離れたら、あなたがたは暗やみだ」と言っておられます。

また、聖書には次のようにも書かれています。

神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。(コロサイ 1・13)

「暗やみの圧制」と「御子(イエス様)によるご支配」と。それは何という大きな違いでしょうか。ここでも同じことが言えます。もし私たち信じる者が、イエス様に頼らなければ、すべての努力はまったく無駄であり、的外れに終わってしまうのです。

主は再び来られる。

主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。(1テサロニケ 4・16, 17)

暗やみから光へ

聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみなが眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。……ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあってむだでないことを知っているのですから。(1コリント15・51, 52, 58)

この箇所で、主のわざに励むことは決して無駄ではない、と約束されています。主に頼ると、私たちは守られ、導かれ、満たされ、用いられます。主に頼らなければ、主は私たちを守ることができないし、導くこともできないし、また用いることもできません。

主は近いのです。(ピリピ 4・5)

ですから、イエス様の再臨を喜んで待つ生活をしましょう。主は、近く必ず起こる再臨に対して、心の備えをすることを要求しておられます。しかしながら、「主の再臨が近いことを喜びながら、生き生きとした信仰生活を送っている」信者は、そんなに多くないのではないでしょうか。「主は今日来られるかもしれない」、「今日はこの地上での私の最後の日となるかもしれない」と思いながら今朝起きた人は、私たちの中に何人いるでしょうか。ただイエス様の再臨を信じるだけでなく、毎日、主の再臨を待ち望みながら生きていくことが大切です。主が明日いらっしゃるということがわかれば、私たちの行動は、全く違ったものになることでしょう。

キリストに対するこの望みをいだく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。(1ヨハネ 3・3)

私たちがイエス様の再臨を待ち望んで生活しているなら、日常のすべてに注意深くなり、光の中を歩もうとするでしょう。この聖句は「今まで以上に待ち望みの生活をしなさい」という意味です。イエス様の再臨を待ち望んでいない信者は不従順であり、不従順は罪です。それは主とあなたの間の隔ての壁となります。また、この聖句は「今まで以上に主に喜ばれる生活をしなさい」という意味です。「自分が気に入ることをする」のではなく、「人の気に入られることをする」のでもなく、ただ「主のみこころにかなうことだけをしなさい」という意味です。

いま私は人に取り入ろうとしているのでしょうか。いや。神に、でしょう。あるいはまた、人の歓心を買おうと努めているのでしょうか。もし私がいまなお人の歓心を買おうとするようなら、私はキリストのしもべとは言えません。(ガラテヤ 1・10)

それはまた、「今までより以上に、まだ救われていない家族のために祈り、戦いなさい」という意味でもあります。イエス様は私たちに、喜んで答えようとなさっておられるのです。

もし私たちが光の中を歩むなら、まわりの人々が主の愛を経験し、闇から光へと移され、あらゆる束縛から主の解放へと移されることを心から願うはずです。イエス様について、次のように書かれています。

(イエスは)群集を見て、羊飼いのない羊のように弱り果てて倒れている彼らをかわいそうに思われた。(マタイ 9・36)

私たちは正直に自分に尋ねてみましょう。私たちは、心の支えもなく、生きがいもなく、人生の目標もなく、喜びもない人々を見ると、つまり「羊飼いのない羊のように弱り果てて倒れている」人々を見ると、イエス様のように心を動かされるのでしょうか。それとも、まったく無関心なのでしょうか。

人々に「イエス様だけを紹介する」こと、「イエス様の救いを伝える」こと、滅びに向かう魂を「イエス様のもとに連れてくる」ことは、もっとも緊急な使命です。人々は、永遠に滅びることのないように救われなければなりません。人々が抱いている宗教観や世界観が問題ではなく、「永遠の救いか、永遠の滅びか」が問題です。イエス様を信じ、従い、光のうちに歩む人々は、まだ救われていない多くの人々に対して無関心でいることはできません。私たちが、イエス様を伝えていく使命に自ら進んで従おうとするとき、主は私たちを喜んでお用いになります。

愛するみなさん。自分だけでものごとを決めず、主にだけ拠り頼みましょう。主の再臨を喜んで待ち望む生活をしましょう。そして、失われている魂の救いのために祈りつづけ、イエス様を伝えていきましょう。

祝福された「ワシントンDCよろこびの集い」

イラク戦争が始まった直後の3月23日から5日間、米国ワシントンDC郊外で、キリスト集会の「よろこびの集い」が開かれました。参加者は80数人、このうち10数人は米国在住者で、約70人が日本から来た人たちでした。

この集いは、テロやハイジャックの危険が言われる中で開かれ、会場がイラク・バグダッドと対峙する米国の首都ワシントンDC近郊であったことなどから、開催を心配する向きもありました。しかし、終わってみれば、そんな思い煩いは全く無用でした。空の旅は、窓外にオーロラを見るおまけもついて順調そのものでしたし、参加のキャンセルもゼロに近く、集った方々は終始平安で、主の守りを実感した大喜びの集まりになりました。

集いは、午前と夕食後の福音集会で合計9人の方が聖書のメッセージを語ってくださり、午後は観光とショッピング、夜は、若者の集いと、大人たちの親密な語り合いが深夜まで持たれました。若者たちの語り合いは午前3時に及んだことが2度あったそうです。このほか2人の女性参加者が洗礼の証しに導かれるなど、中身の濃い、祝福されたものとなりました。米国在住のある女性は「胸にたまっていたものを全部吐き出すことができて……。主にある交わり、というものを初めて体験しました」と喜んでいました。

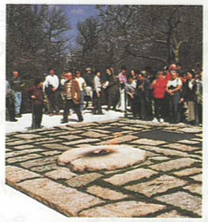
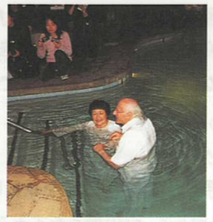
3日目の25日はベックさんの誕生日にあたり、皆で「ハッピー・バースデイ」を歌ってお祝いをしました。そのとき、ベックさんは、手作りのバースデイ・ケーキを前に突然、73年の人生を振り返る「証し」を語り出され、参加者は予期せぬ恵みにあずかりました。

観光では、厳重警備のホワイトハウスにはバスで近づけませんでしたが、永遠の炎が燃え続ける故ケネディ大統領の墓で知られるアーリントン墓地、リンカーン記念堂、ジョージ・ワシントン米初代大統領が居住した歴史的建造物マウント・バーノン、メリーランド州の州都で海軍士官学校のある港市としても知られるアナポリス――などをバスで訪れ、散策しました。自由時間の過ごし方は、スミソニアン博物館で名画を鑑賞した人、ホワイトハウスに向かって物々しい警戒に出会った人、地元の方のお宅で過ごした人、クリスチャンセンターやショッピングセンターで買い物をした人など、まちまちでした。

特に好評だったのは食事です。シーフード料理、中華料理、海鮮料理、メキシコ料理など日替わりでセットされた料理店での食事は、すべて食べ放題。大半の人は食べ過ぎ気味で、霊もお腹も満たされた5日間でした。

ただ一つ残念だったのは、開花の遅れで、ポトマク河畔の桜を見られなかったことです。












イラク戦争と“無縁”の平安な5日間でした

絶望の淵で目を開かせてくださったイザヤ書のみことば



誕生日に語られたベックさんの証し

きょうの誕生日で、私は73年生きたことになりますが、過去に3度、死んでもおかしくないことがありました。最初は誕生のとき。体重が1500gしかなく、医師もお手上げで、「もうあきらめなさい」と母は言われたそうです。次は、生まれてしばらくしてテーブルから落ち、頭を打ったことです。このときも「長くても10年しか生きないだろう」と言われました。3度目は戦争中、私の家が爆弾の直撃で破壊されたことです。その2週間前、父がここは危ないからと言って引っ越したため助かったんですが、引っ越していなかったら、間違いなく死んでいたでしょう。当時、私は近所の若者と毎晩のように屋上に出て、米軍機の爆撃を眺めたり、屋根の上に落とされた物を投げ捨てたりしていましたから。

戦争中の私は、ドイツは必ず勝つと思っていましたし、ヒットラーのために働きたいという気持ちでした。ところが戦争に負け、国内はめちゃくちゃ、電車は1台も動いていないし、橋も全部壊れた状態になりました。私は人生の目的を持つことができず、救いの喜びも確信もありませんでした。そして、生きていても意味がない、死んだ方がましだ、と思って、首をつろうと、ヒモを探しに出かけました。そのときにイザヤ書43章1節のみことばを思い出したんです。

（※注：短時間の「証し」でしたので、ベックさんが話されなかったことを補いますと、信仰を持つ両親のもとで育ったベックさんは、小さいときから毎日聖書を読み、祈る生活を続けていました。そのことが、イザヤ書のみことばを思い出させることにつながった、のだと思われます。）

あなたを形造った方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。」（イザヤ　43・1）

瞬間的に、（このみことばが）本当だったら自分の罪は全部赦されている、死ななくてもいいんじゃないか、と思いました。そして、「イエス様ごめんなさい」と悔い改め、「今からあなたに仕えたい」という気持ちに変えられたのです。こうしてイエス様に出会ってからは、死にたいという気持ちは全然なくなりました。15歳のときでした。

それからは多くの若者とまじわり、彼らを教会に誘ったり、聖書の勉強会をしたりして、多くの者がイエス様を信じるようになったんです。そして、神学校へ行きたいという気持ちになりましたが、父からは、それよりもちゃんとした職業を身につけなさい、と言われました。16歳で親から独立し、教員養成の学校で4年間学んで、先生の資格をとりました。そのころには、学校の先生となって、みことばを伝えれば、宣教師にならなくてもいい、と思うようになったのですが、一つのみことばを通して、私はドイツに残るべきではない、全世界に宣べ伝えることが自分の使命だ、と示されて、結局、当時ヨーロッパ最高の神学校だったスイス・ベアーテンベルクの聖書学校に入りました。

卒業後はアフリカへ伝道に行きたいと祈ったのですが、一番行きたくなかった日本へ来ちゃった。行きたくなかった理由は、日本語



は非常に難しいと聞いていたからです。日本では茨城県の大洗と那珂湊で開拓伝道を始め、東京だけは行きたくないと思っていたのに、東京に来ちゃった。すべて思い通りには行きませんでした。一つだけ思い通りになったのは、15歳のときに知り合ったミンヘンと結婚できたことです。

1964年12月、私は、それまで属していた団体を出ることになりました。みことばが語っていることと、団体が望んでいることとが相い容れない、団体に従うと主を無視しなければならない、ということが分かったからです。団体を離れることは、収入がなくなることを意味していましたから、小さい子を5人かかえていた身にとっては大変な決断でした。でも、それが主のみこころだ、と確信したのです。それからは、いろいろなことがありました。いつもマーガリンで、バターを買ったことがない、というような経済状態でしたが、何度も何度も奇蹟を経験しました。主に守られてきました。主は本当にすごいお方です。イエス様に頼れば絶対に失望させられることはない、と確信を持って言えます。

死は決して終わりではない

私たちの人生は「死へ向かう歩み」である、とよく言われます。
たしかに、死は、だれにも訪れる現実です。
その死の問題を、あなたは解決しておられますか？
死ぬのは怖い、死を考えると不安になる、けれども、
どうしていいか分からない、だから考えないようにしている。
このように死の問題から目をそらしている人が多いのではないでしょうか。とすれば、不幸なことです。死を見つめることは、よく生きるために大切ですし、恐れと悲しみにうちひしがれて死んでいくのは惨めです。大病を与えられたとき、肉親の死に直面したときなども、嘆き悲しみ、うろたえるだけです。
しかし、イエス・キリストを信じ受け入れた人は、まったく違います。永遠のいのちと天国の希望が与えられているからです。イエス様は「わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」(ヨハネ　11・25)、と語られ、「天にある永遠の家」(2コリント　5・1)を備え、私たちを死の恐怖から完全に解放してくださいました。イエス様の呼びかけにすなおに従い、聖書のみことばを確信した人たちは、喜んで、平安のうちに天に召されていきます。
ここに紹介するイエス様を信じて召されていった方々やご家族、友人の「証し」は、その恵みを、感謝しつつ語っておられます。





廖昭雄さん(右)と山本孝子さん





主の聖徒たちの死は主の目に尊い

山本孝子

私の夫、廖昭雄(リャオ・アキオ)は台湾生まれで、第2次大戦中は少年兵に志願して神風特攻隊に属していた人です。私は1996年8月、20数年の未亡人生活を経て、この人と結婚しました。
彼は40年ほど米国に住んでいたのですが、一緒に聖書を読む家族や友人がいない状況の中で長年、確かな心の拠り所を求めていたようです。ロサンゼルスのキリスト集会で初めてベック宣教師にお会いし、一度福音を聞いただけでイエス様を自分の救い主として受け入れ、92年夏に西軽井沢国際福音センターで洗礼を受けたのです。
その後、彼はB型肝炎が進んで肝硬変から肝臓がんになり、98年11月に手術を受け、翌99年6月17日、天に召されました。3年足らずの結婚生活で、「信仰では先輩」と思っていた私の方が多くを教えられました。信仰の深さは信仰の年月に関係ないということ、昭雄のように、いつも神のみこころに合わせたいという意志を持ち続け、目線を天の御国に合わせるなら、神からの深い洞察力と大きな愛をいただけるのだ、ということを学びました。
私たちはよく二人で「実を結ぶ命」を読みました。がんで召されたベックさんの4女リンデさんのことを書いたこの本には、聖書のみことばがたくさん入っていて、20歳の少女リンデが神々しいまでに輝いてイエス様を愛し、従い、死を前にしても喜んでいる姿が描かれています。
本から伝わってくるリンデの真っ直ぐな信仰、なかでも絶望的な病状を告げられた時の態度は、昭雄を驚かせ、感動させました。その時リンデは「パパとママはそのことを知っていますか」と尋ね、「知っています」という返事に「それなら、私は、まもなくイエス様のみもとに行くことを喜んでいます。ただ私が、主のために少ししか実を結べなかったことが、とても残念です」と言ったのです。また「イエス様、あなたのなさることは完全です」というリンデの祈りの中の言葉は、彼に大きな力を与えたようでした。その頃、彼も自分の死を予感していたのだと思います。リンデの遺言の箇所を何度も繰り返して読み、最後の「私のふるさとと、私の目標は、天にあります」という箇所に来ると、真面目な顔で「僕も同じ」と言いました。
昭雄は、聖書のみことばと「実を結ぶ命」に書かれたリンデの態度を通して、不治の病を主からのものと受け入れることができ、死の恐怖から解放されたようです。病床の彼はいつも喜んでいました。
ある時、病室へ入ると、膝をそろえてベッドの上に座っていました。顔は輝き、うれしそうで、しかも威厳があるのです。そして、次のように語りだしました。「Tちゃん(私のこと)。いよいよ天の御国に行く日が近づいたので、今朝イエス様に一生懸命祈っていたら、悔い改めて貴方に詫びるように示されたんだよ。以前ケンカをして、貴女が怒ったとき、『いつか必ず真実を言うから待ってね』と言ったでしょう。その時がきたので、今からそれを言います」それは私がとっくに忘れていたことでしたが、彼の話から、そのとき本当のことを言えなかったのは、ある人をかばうためであったことを知りました。
続けて彼は中学生の頃のこと、特攻隊時代のこと、米国での大学時代のこと、母親の事業のことなどで、主の前に次々に悔い改めをしたのです。
その後、彼の体力は急速に弱まり、死の時は着実に近づいて来ました。召される3日前、彼は目を閉じたまま「主イエス様、ありがとうございます」とかすかな声で祈り始め、耳を近づけた私に「Tちゃん、ありがとう。ありがとう。本当にありがとう」と言いました。次の日は「Tちゃん、ごめんなさい。ごめんなさい…」そして召された日、昭雄は私に「聖書の、くちびるの果実のところを読んでくれる？」と求めました。

> 私たちはキリストを通して、賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえるくちびるの果実を、神に絶えずささげようではありませんか。　(ヘブル 13・15)

うれしそうな表情で聞いていた彼は「こんどは、永遠の契約の血による羊の大牧者の箇所を読んで」と、ねだりました。昭雄の大好きな、よく祈りの中に入れていた聖句です。

> 永遠の契約の血による羊の大牧者、私たちの主イエスを死者の中から導き出された平和の神が、イエス・キリストにより、御前でみこころにかなうことを私たちのうちに行い、あなたがたがみこころを行うことができるために、すべての良いことについて、あなたがたを完全な者としてくださいますように。どうか、キリストに栄光が世々限りなくありますように。アーメン。
>
> (ヘブル 13・20、21)

彼は平安と満足を得たかのように深い眠りに入りました。その彼を囲み、キリスト集会の方々や、岡山の学会からかけつけた娘の夫、主治医までがそろって聖歌を賛美し続けました。別離の悲しみも涙もなく、そこにあるのは御名をたたえるくちびるの果実である賛美と、羊の大牧者に捧げる礼拝だけでした。静かに昭雄は息を引き取りました。
主の聖徒たちの死は主の目に尊い。(詩篇　116・15)の聖句を実感した瞬間でもありました。

主は慰めの日々を与えてくださっています

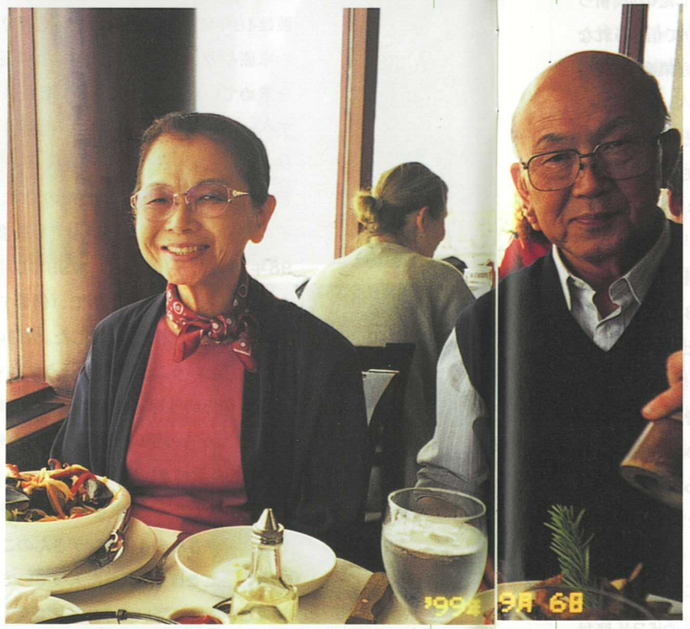
――妻は一番安全で確かな場所に行った――

池田伝一









池田伝一さん、康さんご夫妻





妻、池田康が召天してから、4月21日で半年が経ちました。この間、残された私たち家族は終始、主の恵みの中で守られてきました。家族の一人一人が、かけがえのない平安をいただいて過ごしてきた、ということです。イエス様の救いに与っていて良かった!と、つくづく思っております。

もしイエス様の救いの御手の内に置かれていなかったら、イエス様を信じる信仰が与えられていなかったら、身近な家族の死はむごいものだったでしょう。それぞれが孤独と嘆きの中に、うちひしがれていたのではないでしょうか。

家内の入院中、同じ病棟のご婦人が亡くなられたときの、ご主人の悲しみよう、淋しそうな姿といったら、それはそれは言葉につくせないものでした。だれにもやってくる死を、どうしても受け入れられずに苦悩している姿でした。

しかし、イエス様を信じる者は、どんな窮地に陥っても平安と希望が与えられます。それが救いのすばらしさです。親しい人の死を、魂の故郷である天の御国に迎え入れられた、永遠のいのちの世界に移された、と受け取ることができるのです。そして、再び会えるという希望を持つことができます。妻の場合が、まさにそうでした。

わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。

(ヨハネ 5･24)

召されるということは、このみことばが実現することです。そして、残された者の側からこの事実を考えるとき、日々の祈りの中で名前をあげる家族の一人一人が守られ、導かれていることに感謝するばかりです。

この感謝の祈りは、家内が召されてからも朝に夕に続いていますが、家族の名前を一人一人あげる中で、いつの間にか家内の名が消えていました。思い出しますと、それは家内が召された翌日からのことで、全く無意識に家内の名前が出なくなったのです。でも、考えて見れば当たり前です。家内は召されたその時から、一番安全で確かな場所、賛美と喜びに満ちている所、イエス様のみもとに行ったのですから。

「『今から後、主にあって死ぬ死者は幸いである。』」御霊も言われる。「しかり。彼らはその労苦から解き放されて休むことができる。彼らの行ないは彼らについて行くからである。」　(黙示 14･13)

妻が召されて初めて、彼女が多くの人々から愛されていたこと、特にキリスト集会の方々から愛されていたことを知りました。確かに誠実で、柔和で、平安な雰囲気を持った人でした。争いは好まず、周りの人を和ませるソフトな存在でした。そして、そんな妻が遺してくれた“あるもの”――それはなんとも表現し難い“雰囲気のようなもの”であって、人間の思い出とかいうような感性の領域に属するものではありません――を、家にいると感じるのです。

「彼らの行ないは彼らについて行くからである。」　(黙示 14･13)

妻といっしょに天国へ行ったその良い行ないが、私たち家族の間に遺されて、祈りに変えられているようにも思えるのです。このような妻をつくられ、与えてくださった主に感謝します。

主は私たちの弱さをよくご存知で、残った者に慰めの日々を与えてくださっています。



康さんがスケッチした
ドイツ、ミヘルスベルグの風景

素晴らしいイエス様のご配慮

池田　康

2002年10月21日召天。
この証しは同年3月4日、療養中の東京･国立市の自宅で開かれた家庭集会で語られたものです。

皆さま、こんにちは。今日の家庭集会が、皆さまのお祈りに守られて、このように開催できましたことを、心から感謝申し上げます。集会の前に一言、ごあいさつするように主人から言われて出てまいりました。この話が出たとき、居合わせた息子は「そのあいさつは、お別れのあいさつだよ」と言ったんです。そういうことを、うちでは平気で言うんです。と申しますのも、お正月明けに病院に行きましたところ、担当の先生が「池田さん、よく生きておられましたね」と、おっしゃったんです。

その先生とは同じ信仰を持ち、何でも正直に話し合える信頼関係がありましたものですから、先生もつい本音を口にされたのでしょうが、私にはピンと来なかったんです。自分が死ぬというふうなことは、ちっとも思っていませんでしたし、がんだということも、にぶい者ですから、ピンと来ていなかったんです。ですから、息子からそういうふうに言われても傷つきもしないし、そんな会話がぽんぽん飛んでいるような毎日でしたけれども……、皆さんのお祈りと、背後のイエス様のお計らいの中に、この4ヶ月を過ごしてこられたことは、本当に、言葉にならないんです。ごあいさつも、何を申上げていいか分からないんですけれども、6ヶ月の間、主にある皆様が心からなるお祈りをしてくださり、厚いご配慮をもってなしてくださった数々のことに対して、何のお礼も申上げないで来ましたことをお詫びし、お礼を申上げます。

私は日ごろ、とても健康で、家族の者が、親戚の者が、だれが病気になっても、私は病気にならないだろうと思われるくらいに、それこそ殺しても死なないくらいの元気さといいますか、健康をいただいていました。ですから、そのような者がこういう病気になろうとは夢にも思いませんでした。でも、この6ヶ月が過ぎて、いま考えて見ますと、そのような健康な者が病気をいただいて、それに対するイエス様のご配慮は、それはもう言葉にならないほど素晴らしいものでした。どういうふうであったか、ということを、いま思い出せないほど、イエス様のご配慮は、私にとってはもう100%でした。

がんという病気は、それこそ「が～ん」と来るような大変なもので、そのプレッシャーは、なってみなければ分かりません。死という問題も、天国と直結している私たちにとっては恐ろしいことでもなんでもないんですけれども、実際にそれに直面すれば分かるんで、そして、いままでなじんで来たこの世と別れるという、そういう具体的なものを身近に感じる、ということは実際に宣告されてみなければ分からない、ということを、この半年間に、よしにつけ悪しきにつけ、いろんなことで示されてきました。

それでも、そのような大きなプレッシャーから、イエス様は私を完全に解放してくださったんです。

その御業の一つが、同じ病室の方々の救いです。お聞きになった方も大勢いらっしゃると思いますけれども、私が入院して数日たたないうちに、6人部屋だったんですけれど、私以外の5人の皆さんが救われるという奇蹟的な、み救いの手が、私たちの病室に伸べられたんです。それは私が何かをしたわけでもないし、何かを言ったわけでもありません。その様子を見ていますと、イエス様がすべてをなしてくださる、救いは人間がやるんじゃないということ、それをつぶさに見せていただいたんです。救われた方の中には、すでに天に召された方もいらっしゃるんですが、イエス様は本当に手際よく救いの御業をなしてくださいました。私はその様子を、ただじっと、自分の病気のことなんか忘れて、喜びをもって見させていただきました。

その間、お忙しいベックさんが何度かお見舞いに来てくださいましたし、同じ病室の方々も本当に喜んで、それぞれの救いを体験なさって、ご自分のおうちに帰られたんです。

そのような中で私は、自分が大変な病気にかかっている、ということを忘れるだけでなく、毎日がうきうきする、というのが言いすぎではないほどに、喜びに満たされた日々を病院で送らせていただきました。

それで11月初めに退院させていただいたんですけれども、それからずっと守られて今日に至りました。がんという病気にもいろいろあるようですけれども、すい臓がんは、特に私の場合は発見されて2ヶ月もてばいい、と言われたようなんですけれども、もう半年過ぎちゃったんです。その間、もう本当に皆さまが私のためにお祈りくださり、またいろいろな方法でご配慮くださった、そのことに心から御礼申上げます。

これから先どのように導かれていきますか、イエス様がいままでになしてくださったことを思いますときに、本当にいままでと同じようにイエス様は導いてくださる、私はただその道をすなおに歩んでいけばいい、そのような、申し訳ないほどの境遇に置かされて、これからも毎日を送らせていただける、と思っています。

どうぞ皆さま、病室で知り合いまして、主イエス様のみ救いをご自分のものとされた方々のために、引き続きお祈りください。つけ加えまして、私の世話をしてくれている主人のためにも、疲れすぎないで、ずっと私の面倒をみられますよう、ぜひこれからもお祈りください。どうもありがとうございました。

見るもの、聞くもの、すべてが変わりました

景山修司

1998年6月27日、51歳で召天。1998年4月5日、高知よろこびの集いで、
ガン末期の痛みに耐えつつ、モルヒネで舌がもつれる状態で語られた証しです

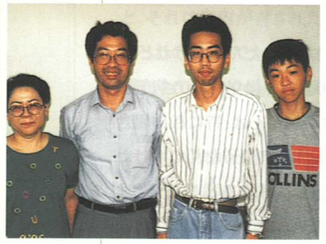
皆さま、お早うございます。岡山キリスト集会の景山修司です。高知よろこびの集いに参加したのは3回目ですが、今回は（体調が良くないため）祈って祈って、祈られて、出てきました。

私は一昨年（1996年）7月の集団検診と、それに続く精密検査で肺の腫瘍を発見されました。そのときのことは鮮明に覚えています。胸部のレントゲン撮影で「そのまま、じっとしていてください」と言われたとき、なぜか死の恐怖が脳裏をかすめて、涙がにじんできました。



影山修司さん





「イエス様、どうしてこんなに早く…、私はまだ若いし、これからではないですか」こんな心の叫びに、「それでは、いつだったら良いのかね」というイエス様の答えが返ってきました。そのとき、ハッと気づかされたのです。70歳とか80歳とか、自分で生きる期間を決めることはできない、ということにです。そのうちに、スーッと死の恐怖が去っていくのを覚えました。あとは何を言われても、こだわることなく、受け入れの心ができました。「これがイエス様のくださる平安かな」と思いました。腫瘍は3.8センチの大きさでした。

このときから私のそばには、いつも聖書がありました。

その後、いろいろな曲折を経て11月に岡山医大病院に入院し、改めて「肺がん」の検査結果を告げられましたが、何の動揺もありませんでした。秋から冬に移る季節の中、家内と手をつないで病院の庭を散歩したことを思い出します。

手術の前、キリスト集会の方々がお見舞いに訪れ、面談室で聖歌を賛美したり、祈ったりしてくださり、喜びと平安に満たされて手術に臨むことができました。

手術は12月3日、行われ、右肺の中・下葉とリンパ腺を切除したとのことでした。その夜、回復室で胸に重みを感じて目を開けると、聖書が乗っていました。私が看護婦さんに病室から持ってきてほしいと頼んだそうです。

この日から、見るもの、聞くもの、すべてが、また変わりました。聖書のみことばが、どんどん胸の中に入ってきました。主はこんなにも私を素直にしてくださるのかと、ただただ感謝でした。

術後の経過は順調で、たくさんの管が一つ外され、二つ外され、不自由さから解放されて、自由の喜びを感じました。看護学生によるキャンドルサービスがあり、一緒に「聖しこの夜」を賛美して、クリスマスの日に退院することができました。翌1997年は、高知よろこびの集いに参加でき、奈良への招待旅行にも行けました。術後半年のCT検査も順調でした。

しかし、あっという間に1年が過ぎ、術後1年の検査を受けた結果は「再発」でした。再手術はできない、ということでしたので、祈ったうえで対症療法を選択しました。このときも自分で信じられないほど冷静に受け止めることができ、3日後の家庭集会で、皆さんに報告しました。

動ける間は礼拝、家庭集会、祈り会に出席したいと思い、体力の回復に努めました。片足に1キロずつ重りをつけて家の中を歩く、というだけの訓練でしたが、それでも後日、結構きつい階段を上れるようになりました。

日々痛みが増し、肉体は衰えてきましたが、不思議と平安が与えられていることに驚かされています。家では、家族3人で聖書朗読、お祈りをしています。いまでは、私は一日中ほとんど横になっていますが、主は憐れみをもって恵みを与えてくださいます。

いま、52年の歩みを振り返って見ると、神様の愛を感じずにはいられません。中学卒で写真植字の技術習得のために上京し、お世話になった社長の会社で働きながら夜学へ通わせていただいたこと、家内との出会い、二人の子を授かったこと、キリスト集会に導かれたことなどなど、すべてが感謝です。

家族全員が救われ、これから主に用いられる器にならせていただきたい、キリストのかぐわしい香りを少しでも放てるように成長させていただきたい、と祈っていたら、肺がんを与えられました。

この世の常識では、悲しむべきことかもしれませんが、病気も痛みも主から与えられたと思えば、すべてが感謝です。残念と思うなら、主のために何ほどの働きもできていない、ということです。

いろいろな方に良くしていただき、とくにキリスト集会の方々の心からのお祈り、お便りに改めて感謝申上げます。これから先、肉的にどのような状態になり得ようとも、霊的には絶えずイエス様を仰ぎ見て歩みたいと願っています。

最後に、この小さなしもべをこよなく愛してくださるイエス様に感謝して、いくつかのみことばを読ませていただきます。

あなたの傷は海のように大きい。だれがあなたをいやすことができよう。（哀歌 2·13）

私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。（哀歌 3·22、23）

天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。（伝道者の書 3·1,2）

ありがとうございました。

「イエス様、病気を感謝します」と語った

—天に召された北原清子さんのこと—

石塚優子

大好きな友人だった北原清子さんは、2000年の11月ごろ、体の不調を訴え、翌年1月、がんのため左腎臓全摘出手術を埼玉県の防衛医大附属病院で受けました。結婚して15年、40歳のときでした。

腹部の左半分をぐるっと周るように縫った術後のあとを見せながら、「病気のことは主人が教えてくれるの。イエス様と主人とお医者様に任せてあるから、何でも主人の言う通り。」と語られ、大きな手術と大変な痛みを経験されたにもかかわらず、落ち着いてご主人の達夫さんにゆだねきっている清子さんに、お見舞いに行った私たちは、穏やかな美しいものを感じました。

一番印象に残っていることは、訪ねた病室のベッドの上に、聖書の詩篇の箇所が開かれており、「**あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。**」（詩篇16·11）というみことばの箇所に強くアンダーラインが引かれていたことでした。

2ヶ月後に退院した清子さんは、達夫さんから、「余命1年」という診断結果を知らされました。その後、その時の素直な気持ちを感謝を添えて伝えてくださいました。「さまざまな思いが出てきて悲しくて涙がたくさん流れました。けれどもイエス様は私の涙を乾かしてくださいました。イエス様は病気を通して、私にいのちの道を知らせてくださっています。一番の願いは、主人がイエス様の愛を知り、罪の赦しを受け取って天国で再会できる喜びをもってほしいことだから、そのことを第一にお祈りしているの。」と言われました。そしてイエス様は清子さんの願いをかなえてくださいました。達夫さんは次のように告白したのです。

「清子の病気の事実を知らされたとき、なぜかすぐに私は、自分の人生においてイエス様のところに来ていないことはまちがっていた。私はイエス様を無視し続けてきた愚かな者だった、ということを知ったのです。そして、私は主に愛されている。私たち夫婦はイエス様にとても愛されていたことを知りました。『いつもお祈りしているよ。時にはお祈りをしてお仕事に行ってみてね。』と言っていた清子の言葉が今はよくわかります。祈ることを知らなかった私は、愛する清子とともにイエス様に祈る者となりました。状況は変わらなくてもイエス様を知っていることは、かけがえのないことです。」

「主人は私が病気になってイエス様のみもとに来ることができたから、そのことが何よりも一番うれしい。私の病気は主人の救いのためにあったの。イエス様、この病気を感謝します。ありがとうございます。」と語る清子さんの大きな目に喜びの涙が浮かんでいました。

召される約2ヶ月前、清子さんは故郷の沖縄に帰りました。沖縄での日々を達夫さんはこう語っています。

「世話になった喜如嘉の兄の家で、清子はクレヨンで描いたようなやんばるの青空と緑を、ベッドの上からよく眺めていました。その瞳はとても澄んでいて、天国を望み見ているかのようでした。

清子は名護の病院から痛みのケアと訪問看護を受けながら、すべてをイエス様にゆだねていました。兄の山城利男さんや私に、『聖書を読んでちょうだい。その続きも読んで。聖歌も歌って。』とよく頼み、3人で祈りと賛美をしながら、イエス様に呼ばれる時を待ちました。また東京にいる友人の石塚さんへ、『**私の愛し慕う兄弟たち、私の喜び、冠よ。**（ピリピ 4·1）』と最後のあいさつを葉書に書き留めていました。そして召される2日前、自分の召天式について、ベックさんに司式をしていただきたいこと、賛美は聖歌の284番と704番をリクエストし、愛する人々への贈り物を感謝の気持ちを込めて選び、私に託しました。」



北原達夫さん、清子さん（左）ご夫妻





北原さんやお友達とご一緒の
石塚優子さん（前列中央）

「2001年7月28日、清子はキリスト集会の方々の賛美の歌に送られて息を引き取りました。まるで賛美の緑に囲まれた赤いハイビスカスの花のようでしたね、と言われた方もいました。微笑んでいるような安らかな顔に、清子は今イエス様のところにいる、死は終わりではないという事実を確信させられ、清子を抱きとめてくださったイエス様に感謝しました。『神さまのなさることは、すべて時にかなって美しいのよ。』と清子が言っていた通りでした。兄の家にいたキリスト集会の方々、お世話をしてくださった看護婦さん、家族全員の上に静かな平安がありました。」

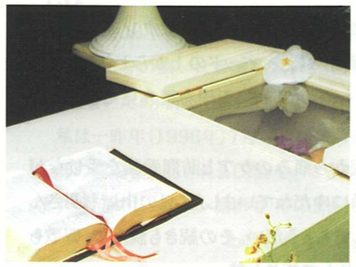
1年後、沖縄で召天1年記念会がもたれました。達夫さんはその席で次のように語りました。

「私はイエス様から彼女の信仰の生活の結末をよく見せていただきました。私は主イエス様を信じる者となりました。私は彼女の信仰の生活の結末にならいたいと切に願う者となりました。まもなく私は、自分の救い主であるイエス様をこの目で見ることができ、そして愛する清子と天の御国で再会できますからほんとうにうれしいです。」

また会う日まで!

イエス様の優しさと明るさにあふれるキリスト集会の葬儀

キリスト集会の葬儀に、初めて出席された方々は、「こんな明るい、希望に満ちた葬儀は初めてだ」、「できれば私も……」とおっしゃいます。なぜでしょうか。その理由は、私たちが、「召された方の霊と魂はすでに天の御国に上っていて、イエス様のもとで幸せに憩っておられること」、「しばしの涙の別れののちには、いつか私たちも天に召されて、再会できること」、「いずれは天の御国で皆がいっしょに、イエス様と永遠にいられること」を確信しているからです。それに、キリスト集会の葬儀は、故人を偲んだり称えたりするための儀式ではなく、「私たちを救い、永遠のいのちを与え、死の恐怖から解放してくださったイエス様のご栄光をたたえ、感謝し、賛美するための集い」です。そして、まだイエス様をご存知ない方に、イエス様のすばらしさをご紹介する集いです。葬儀では、聖書朗読、祈り、賛美、また主に捧げる音楽の演奏などがあり、聖書とイエス様をご紹介するメッセージが語られます。





…私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。(ローマ8・39)





「わたし(イエス様)は彼ら(信じる者)に永遠のいのちを与えます。」(ヨハネ10・28)





神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。(黙示21・3)





「わたし(イエス様)は、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」(ヨハネ11・25)








私たちの国籍は天にあります。 (ピリピ3・20)



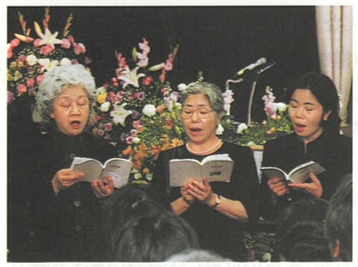


血肉のからだがあるのですから、御霊のからだもあるのです。(1コリント15・44)





「わたし(イエス様)のいる所に、あなたがたもおらせるためです。」(ヨハネ14・3)



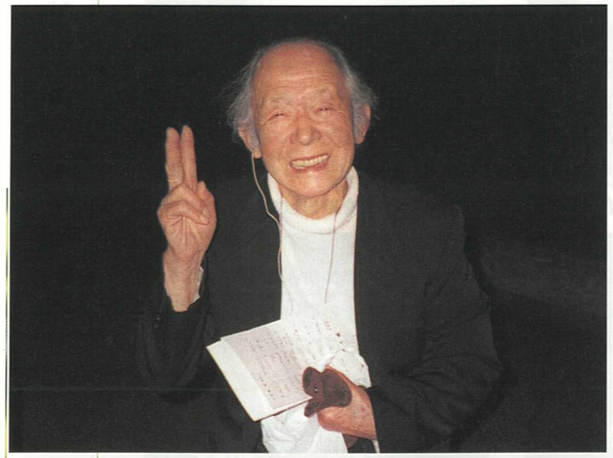


鐵さんはいま、天国でイエス様と一緒です

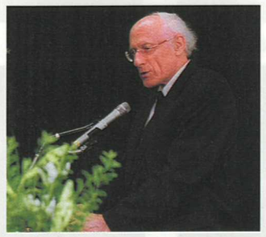
ゴットホルド・ベック



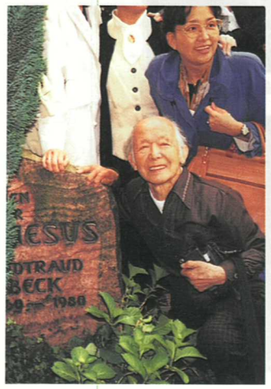
永遠のいのちと天国の希望、イエス様のすばらしさなどが語られるキリスト集会の葬儀。明るい希望に満ち溢れたその雰囲気をお伝えするため、2002年8月27日の鐵（てつ）清六さんの葬儀で語られたメッセージを紹介しましょう。鐵さんは98歳で召天されましたが、95歳ごろまでは毎週のように日曜礼拝や火曜日の集いに出ておられました。90歳を過ぎてドイツのよろこびの集い参加したこともあります。集会では、いつも最前の席で補聴器をつけ、うれしそうに福音に聴き入っていました。その子どものような純粋な信仰で、集会中の人から愛された名物おじいさんでした。













きょう、私たちの大好きな鐵静六さんの葬儀で、このように して主の御名を一緒に賛美できることは、本当に感謝です。鐵さんが信じるようになった「主」のことを、聖書は「望みの神」と言っています。

どうか、望みの神が、あなたがたを信仰によるすべての喜びと平和をもって満たし、聖霊の力によって望みにあふれさせてくださいますように。　（ローマ　15・13）

そして鐵さんも、主イエス様を信じ知るようになった結果として、本当の喜び、まことの平安、それから、生ける希望を持つようになりました。何があっても喜ぶことができ、どういう状況におかれても不安と心配から解放され、前向きに生活することができれば、それこそ、すごいことではないでしょうか。私たちの大好きな鐵さんは、そのことを体験したのです。

聖書は「彼ら（イエス様を信じる者たち）の生活の結末をよく見て、その信仰にならいなさい。（ヘブル　13・7）」と言っています。 これは私たちのためのみことばであって、鐵さんのためではない。彼は天国にゴールインしてしまったからです。そして、きょうの葬儀も、残された私たち、先を越された私たちのための集いです。

鐵さんがこの世を去ったことは、残された私たちにとって、寂しいことです。ご親族の方々は特にその思いが強いでしょう。でも、鐵さんとの別れは一時的なものです。私たちも、いずれ天に召され、また会うことができる、という確信があれば、全然違います。 きょうの葬儀の目的は、鐵さんをほめるためではありません。彼も私たちと同じような者でした。たいした者じゃなかった。 みんな、わがままで、悩みを持ち、苦労している。でも、そのことを鐵さんは隠そうとしなかった。私はダメな者だけど、イエス様を信じるようになって、よかった。そういう気持ちのかたまりだったのです。そして、本当に天国にゴールインした。

いまの鐵さんの気持ちは、もちろん想像できませんが、この世での98年間の人生を、ほんの5分間くらいにしか感じていないのではないでしょうか。永遠の世界に入ったいまは。 死は終わりではない。 結局、死んでから始まる。これこそが、鐵さんがいま、味わっている事実です。

結局、鐵さんは、まことの幸せを知るようになったのです。本当の幸せとは、有名になることではない。金持ちになることでもない。いつまでもイエス様と一緒になる確信を持つことで、死んでから始まることです。

人間のすべての問題を解決できるお方は、イエス様だけです。鐵さんは、そのイエス様に出会って、そういう気持ちでいっぱいになったのです。その気持ちになるまでには、曲折がありましたが、最終的に聖書に書かれている“おもしろくないこと”を認めざるを得なくなったのです。

すなわち、人間は罪の性質を持ち、罪を犯すことしかできない。自分自身を救うことができない。どんなに努力しても、どうにもならない。そんな存在だということです。

しかし、そんな人間が救われるために、まことの神は、何も要求しません。聖書の知識も、立派になることも、お金も要求しません。ただ、正直に、赤ちゃんのように素直になればよいのです。「ごめんなさい」「悪かった」「赦してください」この態度をとればよいのです。

鐵さんも同じ態度をとって、「自分の過ちは赦されている」と確信しました。そして、イエス様は自分のわがままのため、自分の罪のために死なれた、と知って、うれしくなったのです。希望が湧いてきたのです。

主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。
（ローマ　4・25）

天と地を創造された方、十字架で犠牲になられたイエス様は、信じ難いことですけれども、人間ひとりひとりに向かって、「わたしはあなたを愛している」と語っておられます。人間ひとりひとりは、神の愛の対象であり、イエス様の十字架の死は、私たちの罪を赦し、永遠の幸せを得るための源であると、鐵さんは確信するようになったのです。昔のダビデという王様も、同じことを経験したから次のように言ったのです。

幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。
（詩篇 32・1）

同じ詩篇の23篇で、ダビデは次のように告白しています。

たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。
（詩篇 23・4）

結局、ひとりぼっちではない。死んでも、イエス様と共にいる。これこそが、愛する鐵さんの喜びのもとだったのです。鐵さんの信じたイエス様は、宗教家ではありません。イエス様は、救いを与えるお方であるよりも、救いそのものです。宗教家だったら道しるべです。イエス様は道しるべではなく、道そのものです。鐵さんは、イエス様が、死の恐怖につながれている人間を救うために来られたお方であることを確信したのです。

聖書は、鐵さんがゴールインした天国の状態について、次のように言っています。

彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。　（黙示 21・4）

病気のない世界。死を知らない世界。孤独のない世界。ちょっと考えられない。けど、鐵さんは、この世界に入り、この恵みに預かるようになったのです。（中略）

天国でイエス様の近くにいる鐵さんは、いま何を考えているのでしょうか。

「天の御国にあなたもぜひ来てほしい。生きている間に、自分の罪を認めて悔い改めれば、イエス様の救いにあずかれる。天国への道が開かれる。そうイエス様は約束してくださっています。イエス様の約束だけを信じましょう。ただへりくだればOK。頭を下げれば大丈夫。要求されているのは、それだけだよ。もう私はどうでもいい。私のことは忘れてもらって結構。ただイエス様に頼ってもらいたい。」

そういう気持ちでいっぱいなのではないでしょか。

信仰の確信について

愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。なぜなら恐れには刑罰が伴っているからです。恐れる者の愛は、全きものとなっていないのです。（1ヨハネ　4･18）

聖書のみことばに触れる人々はかならずしも少なくありません。いわゆる教会に属している人々、クリスチャンと呼ばれる人々も決して少なくないと思います。

しかし、その信仰の歩みにおいて、確信を持って喜んで歩んでいるクリスチャンは多いかというと、そうではないように思います。どうも心の底から納得できないところがある、いまひとつ確信が持てない。そういう状態に留まっている人々が多いのではないかと思うのです。

自分は聖書に書いてあるとおりに、天地万物の創造者なる唯一の神を信じている。神の御子イエス様をも信じているし、特に疑問があるわけでもない。しかし、自分には信仰の確信がない。信仰、信仰と口では言っているけれどもボヤ―っとしていて、「これだ!」という確信がない。そういう思いを持って試行錯誤している人々も多くおられるのではないでしょうか。信仰の確信に立つことができない、という悩みです。

信仰の確信に立つことができなければ、私たちは力を持つことができません。どういう状況の中にあっても、喜びと感謝を持つことができません。

ですから、私たちにとって必要なことは本当の信仰の確信ではないでしょうか。心の奥底から納得できるような、「救いはこれだ!」という、いわば手に触れることができるような、確かなものが必要ではないでしょうか。ヨハネは、その手紙の冒頭に「私たちが目で見たもの、じっと見、手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて」と書きました。

信仰はあいまいなものではありません。確かに自分は信じたいと願っている。しかも長い間、教会や集会に集っている。けれども、いつまでたっても信仰はボヤ―っとしたままである。こういうことであれば、悲しいことですね。私たちの信仰の目はさやかに開かれる必要があります。それはまた、主の切なる御心（みこころ）でもあるはずです。

大変な悩みの中から救い出されて、大喜びしている人々もいます。信仰は不思議なもので、深い悩みの中にいた人ほど、はっきりした確信を得るようです。「罪の増すところ、恵みもいや増せり」と聖書にあるように、暗闇の中、泥沼の中を這いずるように苦しんでいた人の方が、イエス様の救いを深く知って、喜びも深いようです。

いうまでもなく、罪を犯し続けるのが良いことだというのではありません。罪の刈り取りは誰も免れませんから。しかし、長い間、みことばを聞き、集会に連なっている自分の方があいまいな信仰のままでいるというのは、悲しむべきではないでしょうか。信仰に堅く立つためには、あるいは信仰的な判断がどういうものかが分かるためには、信仰の目がはっきり開かれる必要があります。

信仰は重荷からの解放と、正しく生きる力を与えてくれるものでなければ、意味がありません。信仰は単なる飾り物であっては無益です。私たちはいままで、いろいろな飾り物を身につけて生きてきました。この世の様々な「良いもの」といわれるもの、教養だとか、この世の暮らしぶりだとか、学歴だとか、社会的地位だとか、そういうものは皆、飾り物です。

それらの飾り物に、また一つ信仰という飾り物を付け加える必要はないのですね。飾り物はもう十分です。私たちは飾り物ではなく、本当の意味で必要なものが欲しいのです。「いわゆる信仰」という飾り物ではなくて、本当の救い、「確信を与えてくれる信仰」こそが、本当に必要なものなのです。

求めなさい。そうすれば与えられます。捜しな

神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。

さい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。（マタイ　7･7､8）

これはよく知られているみことばです。「あなたがたが得られないのは求めないからです」と「ヤコブの手紙」にもあります。

自分は本当の確信をつかんでいない。だから自分は信仰によって生きることができない。そのように感じているのであれば、自分の虚しい、無力な信仰を主に訴えるべきです。「主よ、どうぞ私の信仰の目を開いてください。私に本当の信仰を与えてください。」

このように私たちが求め続ければ必ず与えられると、イエス様は約束しておられます。聖書はくり返しくり返し、本当に救われたいと願う人は必ず救われると約束しているのです。ですから、問題はいつも私たちの側にあるのです。

神様は私たちを救いたくて、助けたくて、祝福したくて仕方ないのですから。だから、私たちの側に何等かの問題があるのです。

自分は本当に真理を知りたいと願っているのだろうか。これが問題なのですね。たとえ真理というものが自分にとって辛い、痛いものであっても、真理を私に示して欲しいという願いがあるかどうかが問題なのです。真理などどうでもよい。ごまかしだろうと構わない。自分に都合の良いことであれば。大勢の人々を味方にでき、大勢の人々と仲良くやっていけるならそれでよいというのであれば、私たちは本当に真理を望んではいないのです。

主よ。あなたの道を私に知らせ、あなたの小道を私に教えてください。あなたの真理のうちに私を導き、私を教えてください。（詩篇　25･4,5）

人は真理の土台に立つ時だけ、揺るぐことがありません。逆に真理でなく、人間的、肉的なものの上に立つ時、遅かれ早かれその誤りは明らかになってきます。私たちはある人の立場が真理であるかないか、すぐに判断できないかもしれませんが、しかし時がそれをあらわにしてきます。

私たちは、真理に逆らっては何をすることもできず、真理のためなら、何でもできるのです。（2コリント　13･8）

信仰の歩みにおいてはいろいろな問題が起こってきますが、しかし私たちは先走って即断する必要はありません。主の御手に委ね、時に委ねればいいのです。そして、つねに真理の内を歩もうと祈り求めるべきです。

神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。（1テモテ　2･4）

神は、私たちに真理を啓示したいと願っておられます。真理を知って、本当の解放と自由を得ることを願っておられるのです。神は、私たちがこの世で物質的に満たされて、何不自由なく生活することを望んではおられません。真理を知り、永遠なるものに心の目を開かれ、本当の望みを持って、喜んで生きるようになることを望んでおられるのです。ですから、この世の富を求めても与えられないでしょうが、真理を心から求めるなら誰にでも必ず与えてくださるのです。

それでは一体、信仰の真理とは何でしょうか。それは、神のご愛に応えて私たちも神ご自身を心から愛する者となるということです。神が与えてくださる恵み、助け、望みなどの贈り物を愛するのではなく、神ご自身を愛するということです。それこそ、神が私たちに求めておられることです。

私たちは何と長い間、神ご自身を愛そうとはしないで、神ご自身を求めようとはしないで、神の助けや恵みなどだけ求めて、それを信仰生活だと思い込んでいたことでしょうか。神ご自身に心を注ぐのではなく、神の与えてくださる賜物ばかりに目を注いでいたことでしょうか。神は私たちをご自分の子どもとして愛そうとしておられるのに、私たちは神が何を与えてくださるかだけを考えているのではないでしょうか。そうであれば、神は私たちにとって天の父ではなく、取り引き相手、ただの商売相手に過ぎません。これは断じて信仰ではなく、真理はそこにはないのです。

私には子どもが5人いますが、おもしろいことに幼い頃には私がどこかへ行こうと誘うと、大喜びで遊びでもなんでも全て放り出してついてきました。ところが、大きくなって、4～5歳になると反応が違ってくるのです。「何か買ってくれるの」と、もう期待するところが違うのです。私と一緒に行くこと自体を喜ばなくなるのです。これは私にとっては淋しいことです。以前はどこにでも喜び躍ってついてきたのに、今は条件を出さないとついてきません。

これは、本当の私との交わりではないのです。何をくれるか、そこに関心は注がれているのです。私たちも神様に対して、そういう態度を長い間とっている場合があるのではないでしょうか。神様が「どうして私の愛を受け入れようとしないのか。」とおっしゃっているのに、「神様、あれをください、この問題を解決してください。」という態度を取るのです。神様との交わり、すなわち父と子としての交わりが「いのち」だということに気づかないで、神様の祝福と助けだけに関心を奪われているのです。

これは大きな誤りであり、悲しむべきことです。神ご自身を心から愛そうとせず、神の助けと恵みだけを求めるということは信仰ではありません。そこにあるのは、エゴにしばられている自分自身の欲求だけです。それは決して真の自由、解放ではありません。人格的な交わりの大切さに気づかず、神が自分に何をしてくれるか、という目でしか物事を見ないからです。実は、あらゆるものを自分の利益になるかどうかという視点で捉えること、このことが聖書でいう「罪」なのです。

奴隷はいつまでも家にいるのではありません。しかし、息子はいつまでもいます。（ヨハネ　8･35）

奴隷は主人が自分に何を与えてくださるか、ということにだけ心を向けます。奴隷は子どもではありません。しかし、神は私たちを「愛する息子」として受け入れ、私たちも御父を心から愛するようにと願い続けておられるのです。何故ならその時、私たちは本当のいのち、喜び、力の秘訣がどこにあるかを知るようになるからです。そこにこそ信仰の確信の秘訣があるはずだからです。だからこそ、イエス様はこう言われたのでしょう。

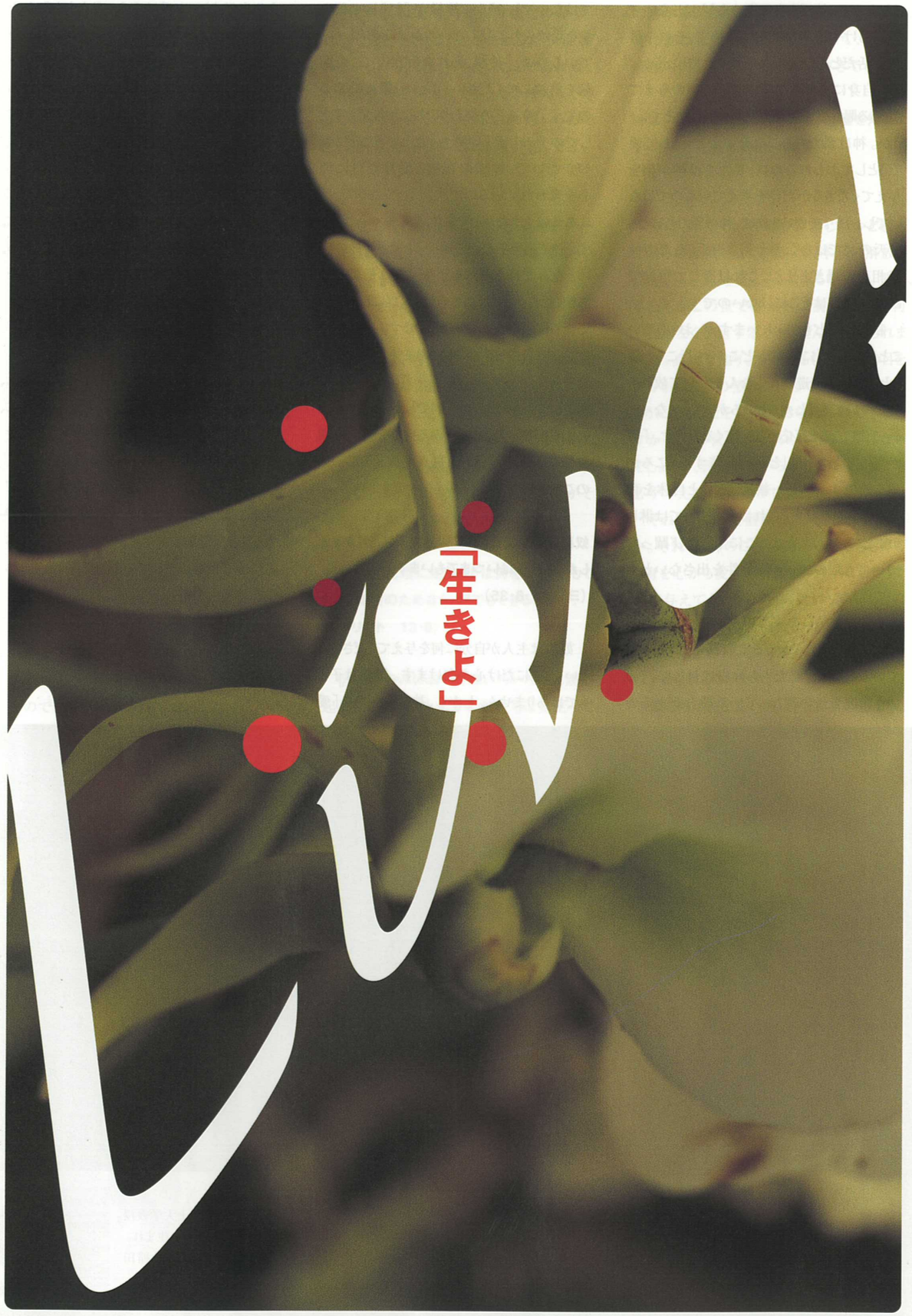
一番たいせつなのはこれです。「イスラエルよ。聞け。われらの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」（マルコ　12･29､30）

イエス様が全身全霊をあげて御父を愛し、それ以外のことは全く念頭になかったように、私たちもイエス様にならい、そのように主を愛するならば、一切の悩み、重荷は消えてなくなるのではないでしょうか。そうなれば、主ご自身こそが恵みそのもの、いのちそのものであることを知るはずです。一体、私たちは本当に主ご自身を愛しているのだろうか。これこそが最大最終の問題だと思うのです。

一番たいせつなのはこれです。「イスラエルよ。聞け。われらの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」（マルコ　12･29､30）

蘇畑卓郎
略歴／東京富士大学教授。
1945年奄美大島生まれ。
古見中、大島高、早稲田大学政経学部卒。





あなたの生まれは、あなたが生まれた日に、へその緒を切る者もなく、水で洗ってきよめる者もなく、塩でこする者もなく、布で包んでくれる者もいなかった。だれもあなたを惜しまず、これらの事の一つでもあなたにしてやって、あなたにあわれみをかけようともしなかった。あなたの生まれた日に、あなたはきらわれて、野原に捨てられた。わたしがあなたのそばを通りかかったとき、あなたが自分の血の中でもがいているのを見て、血に染まっているあなたに、「生きよ。」と言い、血に染まっているあなたに、くり返して、「生きよ。」と言った。
（エゼキエル　16･4～6）

私たちが生まれてきたのは、私たちが、自分自身の血の中でもがいている時、そばを通りかかってくださるこの一人の方に出会うためではないでしょうか。そして、その後、私たちがこの世を生きていくのは、彼をもっともっと知って豊かな交わりが与えられるためではないかと思うのです。聖書は私たちに、「人」の隠された真実を告げています。

私たちが一人で苦しみもがいている時、必ず、そばを通りかかって下さる方がいる。これが聖書の告げる「人生の秘密」です。

■出会い

約2000年前、エルサレムのベテスダと言う池のほとりに、38年間伏せっている男がいました。ある時、イエス様はその男のそばを通りかかられました。そして、声をかけられました。

「よくなりたいか。」病人は答えた。「主よ。私には、水がかき回されたとき、池の中に私を入れてくれる人がいません。」
（ヨハネ　5･6,7）

当時、池の水が動いた時、最初にこの池に入ったものは癒されると言われていました。彼は、イエス様の呼びかけに対して、的が外れたかに見える返答をしました。しかし、その答えの中に私たちの真実の姿を見出します。

彼の答えは、38年間にわたる苦しみや悩みの中から搾り出された、ことばにならない叫びではないでしょうか。彼の叫びは「誰も助けてくれない。」と私には聞こえます。心の中に渦巻く、自分でも整理のつかない思いとあきらめの中で、彼はその時、そばを通りかかって下さった方に叫びました。同じように、私たちも、ことばにならない、人に伝える事のできない叫びを心の奥底で叫んでいるのではないでしょうか。それは、時として自分自身でさえ気付かなくなっていることがあるのです。

イエスは彼に言われた。「起きて、床を取り上げて歩きなさい。」（ヨハネ　5･8）

すべてを理解して下さっている方の呼びかけです。「生きよ。」と言う意味です。この短いことばは、イエス様ご自身の全生涯がかかったことばです。この事実を、後に私たちは知るようになります。私たちにこのことばを個人的に伝えるために、イエス様は来て、十字架の上で死なれたのです。

病人が群がっていたベテスダの池とは、私たちの住むこの世界そのものではないでしょうか。この世は大きな大きな病院です。私たちのそばを通りかかる方に出会う前は、皆病人でした。まことの医者を知らない病人でした。彼に出会った今も同じように病人です。しかし、病気を自覚するようになった病人です。まことの医者と親しい交わりを持つようになった病人です。病気が治るようにと願うだけの悩む病人ではありません。悩みながらも病気を与えられた自分そのものを、一切お委ねしたいと祈るようになった病人です。この日常の戦いの中に、今まで、見た事も、聞いた事もないような平安や大きな喜びを見つけるようになった病人です。これが、聖書が語る私たちの隠された真実です。聖書が告げる福音です。

もし、「誰も助けてくれない。」と叫びたくなったなら、ベテスダの池のほとりで起こった出来事を思い起こして下さい。「よくなりたいか。」と言う呼びかけに耳を傾けて下さい。必ず、私たちのそばに「生きよ。」と個人的に語ってくださる方がおられます。

■出会った方の人格と■私たちの仕事

またある時、イエス様は一つのたとえを話されました。

「天の御国は、自分のぶどう園で働く労務者を雇いに朝早く出かけた主人のようなもの」
（マタイ　20･1）

と言う話でした。主人はその後、九時、十二時、三時、そして最後に夕方の五時頃市場に出かけて行きました。私たちを探して、雇うためでした。ぶどう園の主人であるイエス様は市場に立っている人達に言いました。

「なぜ、一日中仕事もしないでここにいるのですか。」彼らは言った。「だれも雇ってくれないからです。」彼は言った。「あなたがたもぶどう園に行きなさい。」（マタイ　20･6,7）

「だれも雇ってくれない!」この短いことばの中に、夕方の五時ごろ雇われた人たちの、心の中の叫びが聞こえてきます。「誰も助けてくれない。」ベテスダの池のほとりでイエス様に出会った私たちと同じです。彼らがどんな生涯を歩んで来たのか、聖書のこの箇所には一切書かれてありません。私たちがどのような仕事に従事していたとしても、イエス様は私たちに、仕事をしてこなかったと言われています。この地上ではどんなに重要な仕事に携わっていたとしても、イエス様は言われるでしょう。

「なぜ、一日中（生涯）何もしないでここにいるのですか。」

ある人は言われるかもしれません。「私は、一生懸命働いてきた。労苦の連続だった。定年を迎えて、今からゆっくり休みたい。」これは、彼にとっては真実なことばでありましょう。しかし、聖書は人の思いと異なったメッセージを伝えています。今までは市場の表舞台で、



自分が立てた計画に従って、その実現のために走り続けてきた事でしょう。自分の思いや計画で頭の中が占められていたため、造り主の呼びかけが聞こえなかったのではないかと思うのです。

ところが、私たちには、まだ、仕事が残っているのです。イエス様に出会う仕事です。彼に雇われる仕事です。彼がどのような方であるか良く良く知る仕事です。そして、ただ一方的に大きな恵みを受け取る仕事です。このまことの仕事をするために、私たちはこの世に送られて来たのではないでしょうか。

ですから、「だれも雇ってくれない！」と訴える人は幸いです。この世の価値観では舞台裏の、夕暮れ時の市場のはずれにたたずむ人は幸いです。この時から私たちは、一人の人格と出会うようになります。この方の価値観は、この世の価値観と全く異なります。

こうして、夕方になったので、ぶどう園の主人は、監督に言った。「労務者たちを呼んで、最後に来た者たちから順に、最初に来た者たちにまで、賃金を払ってやりなさい。」そこで、五時ごろに雇われた者たちが来て、それぞれ一デナリずつもらった。最初の者たちがもらいに来て、もっと多くもらえるだろうと思ったが、彼らもやはりひとり一デナリずつであった。
（マタイ　20･8～10）

何も目に見える仕事をしなかった者たちも、同じ一デナリを受けました。私たちが今日出会う方の人格がここに現れています。彼が見ておられるのは、外から見える仕事ではありません。心の奥底に悩み、悲しみ、苦しみをしまい込み、霊的に絶望を知るようになった一人の人間そのものです。また、心の中で渦巻く怒り、憎しみの中で、自分自身の弱さ、みにくさ、陰険さを知るようになった一人の人間そのものを見ておられます。イエス様がずっと待っておられたのは、やっと帰る所を求めるようになった、子どものようになった者たちです。私たちが彼のもとを家出したその時から、この時を待ち続けておられます。聖書は私たちに対するイエス様の溢れるばかりの願いで満ちています。

「耳のある者は聞きなさい。」（マタイ13･9）

と何度も、何度も彼は呼びかけています。彼の声は、聞く耳を持っている者にしか聞こえません。聞く耳のない人は神の国には入れないのです。聖書には子どものようになった、多くの大人が紹介されています。

神の国は、このような者たちのものです。まことに、あなたがたに告げます。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、はいることはできません。
（マルコ　10･14、15）

このことばをまごころから受け取る時、私たちのこれまでの生活や考え方は全く崩れ去ってしまいます。むずかしい思想や主義をはるかに超えた力が、このやさしいことばの中に秘められています。「子ども（幼児）のようになって信頼する」ことこそ、私たちに対するイエス様の切なる願いです。信頼とは幼児に見られるような、単純な素直さの中にあるものではないでしょうか。

イエス様の人格とはこういうものです。神の国はこのような人格で満たされた所です。この地上は不完全ですが、彼に頼る者はこの「ぶどう園」に雇われるようになります。

■報酬の意味

世界中にイエス様を紹介した、パウロという男が自分の受けた恵みについて手紙を書いています。

働く者のばあいに、その報酬は恵みでなくて、当然支払うべきものとみなされます。何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。（ローマ　4･4、5）

イエス様が語られた「ぶどう園の物語」はパウロ自身の証しでもあります。全く一方的にこの恵みを与えられたと彼は告白しています。パウロはキリスト者を迫害することが自分の仕事･使命であると考えていましたが、ある日イエス様に出会いました。パウロはそれまで必死に生きて来たのです。しかし、イエス様に出会った時、彼は「夕方の五時頃、何もしないで市場に立っていた人」になりました。それまでの彼の輝かしい功績は価値のないものとなりました。そして、彼も声を聞いたのです。「あなたもぶどう園に行きなさい。」その日から180度生きる向きが変わりました。「何の働きもない者を、義と認めてくださる方」と共に歩むようになったのです。そして、その後、兄弟･姉妹に送った手紙の中で、次のように言うようになりました。

私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。
（2コリント　4･18）

私たちにもこの恵みが用意されています。日の暮れる夕方の五時ごろイエス様に出会った、何の働きもない私たちにも、同じ恵みが与えられています。私たちは、目で見えるどのような事柄も要求されていません。もし、この世の市場で疲れ果てたら、この呼びかけを思い出して下さい。

「なぜ、一日中仕事もしないでここにいるのですか。」「あなたもぶどう園に行きなさい。」「生きよ。」と個人的に語って下さる方と必ず出会うようになります。

■造り主の目的

造り主の目的、望みは「私たちと本当に親しい交わりを持ちたい。同じ喜びを持ってほしい」という願いではないかと思います。私たちに「帰って来るように」と聖書全体が告げています。愛する者と親しい交わりを回復したいと願っておられます。

「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたの喜びが満たされるためです。」
（ヨハネ　15･11）

そして、そのために、最も愛するひとり子であるイエス様を、死ぬためにこの世に遣わされました。十字架への道を聖書は語っています。わかってもわからなくても、このことだけはお伝えしなければなりません。聖書の中心は「十字架」です。「犠牲の死」です。そして、「底なしに深い私たちの罪」と「限りなく大きな主の愛」がそこにあります。

■十字架の意味

イエス様が十字架の上で耐えられた悲しみは、彼が愛しておられる私たち人間と心が通わなくなった悲しみではないかと思うのです。背を向け続けていた私たちへの熱い思いが、十字架の悩みそのものです。これほどまでに私たちと、親しい交わりを望んでおられました。ご自身の死だけが私たち人間の回復の道であったと、彼に出会った者は知るようになります。

イエス様が十字架の上で苦しまれた苦しみは、彼が愛し、愛された天の父なる神との交わりが全く途絶えたことではないかと思います。私たちが造り主を無視してわがままに生きてきた罪の身代わりに、イエス様は罰を受けられました。罰として与えられたこの全くの孤独は、主イエス様にとって、最も深い苦しみであったに違いありません。いかなる時も一緒であった父との断絶は、肉体的な苦しみに増して耐えがたいものであったに違いありません。私たちも、最も愛する者との別れ、断絶、或いは裏切りを通して、イエス様が十字架の上で味わった私たちとの、また父なる神との断絶がいかに大きな悲しみであったか、少しだけ知るようになります。

ですから、私たちはもう大丈夫なのです。彼が全ての「罪」を引き受けてくださったからです。私たちは、夕方五時頃ぶどう園に雇われた労務者のように、何も働きがなくても大丈夫です。イエス様が一切を完了してくださったからです。私たちが受けるべき悲しみも、苦しみも、涙も、私たちの身代わりとして全て自ら負って下さったのです。

私たちの経験した苦しみは楽しみに変えられ、悲しみは喜びに変えられます。これが聖書の告げる福音です。約束です。

あなたがたは、苦しみなさい。悲しみなさい。泣きなさい。あなたがたの笑いを悲しみに、喜びを憂いに変えなさい。（ヤコブ　4･9）

「悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。」（マタイ　5･4）

苦しみの中で、また、悲しみの中で私たちは彼に出会います。彼は悲しみの人だからです。悩みの中で彼に支えられ、決して癒されることのなかった悲しみを、深い所で慰められるのです。ただ声をかけて下さるだけではありません。イエス様は全存在を賭けて、私たちを贖ってくださいました。「完了した。」のです。

この後、イエスは、すべてのことが完了したのを知って、聖書が成就するために、「わたしは渇く。」と言われた。そこには酸いぶどう酒のいっぱいはいった入れ物が置いてあった。そこで彼らは、酸いぶどう酒を含んだ海綿をヒソプの枝につけて、それをイエスの口もとに差し出した。イエスは、酸いぶどう酒を受けられると、「完了した。」と言われた。そして、頭をたれて、霊をお渡しになった。（ヨハネ　19･28～30）

酸いぶどう酒を受けられた時、完了したのです。苦しみを全て受け終わるまで、イエス様は差し出された酸いぶどう酒を拒絶されました。当時、苦味を混ぜた酸いぶどう酒は苦しみを和らげるために使われたようです。彼は、罰として与えられた苦しみを全て受けられた後、初めて酸いぶどう酒を受けられました。もう肉体的な痛みを和らげる必要がなくなった地上の最後の時に、酸いぶどう酒をお受けになりました。イエス様の霊的な喜びの飲み物として、私たちをそのままで受け入れ、飲み干して下さったのです。

酸いぶどう酒とは、腐ったぶどう酒です。腐りきって使い物にならないぶどう酒です。私たち自身そのものです。神様が良いぶどう、甘いぶどうになるように　望んで、彼のぶどう園に植えられたのに、甘いぶどうではなく、腐ったぶどうができました。わたし達の隠された秘密です。聖書が告げる私たち「人」の実態です。そのような私たちを受け入れてくださることが、イエス様の来られた目的、十字架の意味ではないかと思うのです。

聖書が告げる十字架は、腐ったぶどうで作った、酸いぶどうの物語です。彼がこの世のいのちを終えるとき、彼の使命を終える時、彼が栄光を受けられる時、酸いぶどう酒を受けられたという事実が全てを語っています。イエス様の苦しみを喜びに変える飲み物として、腐ったぶどう酒を選んで下さいました。甘くなれなかった腐ったぶどう酒を飲み干すために、彼は来て、死んで下さいました。ただ、この歴史上の事実を聖書は告げています。

私たちが考えている、あれや、これやの事ではないのです。ただ、腐ったぶどう酒を十字架の上で、喜びとして飲み干すためにだけ来られた方がおられます。

腐ったままでいいのです。甘くなくてもいいのです。陰険そのものでもかまわないのです。そのままでいいのです。一切を知った上で飲み干して下さった方がおられます

「生きよ。」と言う呼びかけは、ただのことばではありません。イエス様がいのちを賭けて伝えて下さったことばです。主御自身が血に染まって下さいました。彼の血は「犠牲の血」です。「十字架の死」です。

この時、一切が完了したのです。主のもとに来てください。

聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」（ローマ　10･11）



岡本雅文
略歴／栗田工業（株）設計部長
広島県出身、二河中、呉三津田高、山口大学工学部卒



聖書の中には特効薬がいっぱいあります

なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。兄弟に向かって、「あなたの目のちりを取らせてください。」などとどうして言うのですか。見なさい、自分の目には梁があるではありませんか。偽善者たち。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができます。（マタイ　7･3～5）

まさに私のことでした。自分のことは棚に上げて、人を色メガネで見てしまう者でした。患者さんのために、と言いながら、自分のために頑張っていました。そんな私にもイエス様はずっと愛を注いでいてくださり、ある時それに気付かせてくださいました。そして神様を信ずる者へと新しく生まれ変わらせてくださったのです。信仰を持った今でも、弱い私は時にこの性質が顔を出してしまいます。しかし神様の御前でへりくだって素直に謝り、いつも守り支えてくださっていることを実感し、感謝を捧げることができます。そして病気で悩み苦しんでいる人のために祈らせていただくという恵みを与えられています。

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。（2コリント　5･17）

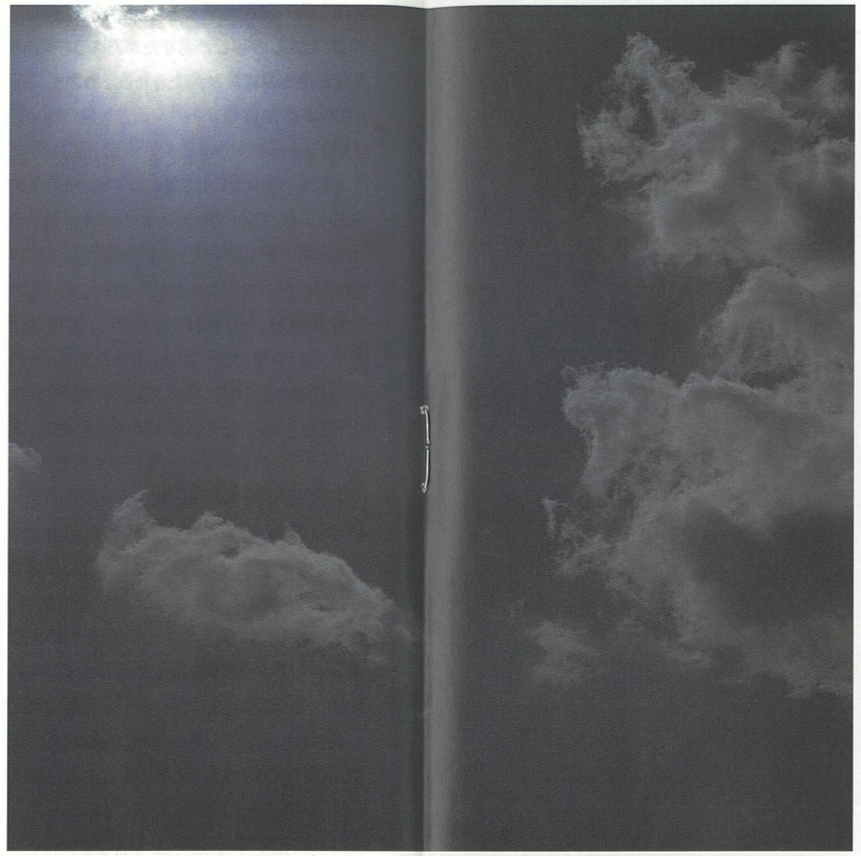
聖書には盲人の話がよく出てきます。それほど目が見えないということは、この世に生きている人間にとってどうしようもなく辛いことの証明であるわけですが、しかしながら、イエス様を全面的に信ずることによって考えられないような喜びと平安が与えられる、という奇跡を証明している部分でもあります。

人が外界から得る情報の約80％は目から得られていると言われています。最近盛んに、クオリティ･オブ･ライフ（QOL）、生活の質、という言葉が使われていますが、それの維持に大きな役割を担っているものの一つが“見ること”です。年々医学の進歩によって治せる病気は増えていますが、治療法が全くない病気も数多く存在するのが現実です。その代表的なものの一つが先天性の病気です。生来、または非常に若い年齢で失明してしまう場合もあります。聖書は次のように述べています。

イエスは道の途中で、生まれつきの盲人を見られた。弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです。」（ヨハネ　9･1～3）

本当にすばらしい、明快なみことばではないでしょうか。弟子たちがした質問のように、ともすれば私たち人間はこのような方々に対して、両親の責任だとか先祖のばちが当たったなどと、とても恐ろしいことを考えてしまう罪深い者です。それをイエス様は、誰の責任でもない、もちろん本人の責任でもない、と断言されています。それどころか神のわざが現われるためです、と言われています。胸のつかえが取れる思いです。イエス様はこの盲人のような弱い者、苦しんでいる者にこそ目を留められ愛しておられるのです。

よく患者さんからこんな話をお聞きします。「見えなくなるくらいだったら死んだ方がましだ。」　確かにこの世の美しい自然、建造物、周囲の人たち、テレビ、書物など、見えないことは本当に辛いことです。死んだ方がましだ、と考えても無理のないことかもしれません。以前の私は、もうどのようなことをしても治る見込みのない方に接する時、ただお話を聞き、ひたすら同情し、空虚な励ましを繰り返していました。私に一生懸命辛い胸の内を訴えかけてくださった方は、それで気持ちが落ち着いたのでしょうか。たとえその時は気分が多少晴れてもすぐまた元に戻ってしまったでしょう。周囲の家族や友人も心から心配して励まそうとするのですが、やはり本当の平安は得られないばかりか、逆にますます落ち込んでしまうことすらあるのではないでしょうか。また医者がよく使う言い回しに、あなたの病気が悪性である可能性はこれくらいの割合です、とか、病気が治る確率は何％です、という言い方があります。これはこれで、統計学的な根拠に拠っていますから間違いではないのですが、当の患者さん自身にとっては悪性か良性か、治るか治らないか2つに1つなのです。95％治ると言われても、残りの5％かもしれないと思うと心の平安は得られません。医者もそのことは分ってはいても、100％とは言えないのです。



そういう人間同士の関係と違い、イエス様との関係は全く中間に曇りがなく疑心暗鬼がないのです。イエス様は、いつでも何処でも、辛いこと悲しいこと不安なことなど、全部聞いてくださる唯一のお方です。何も飾らずにありのままを告白すればするほどイエス様は喜んで聞いてくださいます。しかも私たち人間と違って何も先入観なしに、何も偏見なしに聞いてくださいます。そうして全部をさらけだして祈っていると不思議な平安で心が満たされてきます。100％の平安を与えてくださるのはイエス様しかおりません。

私が主を求めると、主は答えてくださった。私をすべての恐怖から救い出してくださった。（詩篇　34･4）

「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」（ヨハネ14･27）

イエス様は、ただじっと静まって耐えるようにと、私たちに語りかけているわけではありません。ちゃんと解決の道も用意してくださっています。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。（1コリント　10･13）

神が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではなく、力と愛と慎みとの霊です。（2テモテ　1･7）

“目から鱗（うろこ）”という表現は一般的によく知られ使われていますが、聖書の中にその語源となる事実が書かれています。

そこでアナニヤは出かけて行って、その家にはいり、サウロの上に手を置いてこう言った。「兄弟サウロ。あなたが来る途中でお現われになった主イエスが、私を遣わされました。あなたが再び見えるようになり、聖霊に満たされるためです。」するとただちに、サウロの目からうろこのような物が落ちて、目が見えるようになった。（使徒　9･17、18）

この時サウロはまだイエス様を信じていないばかりか、迫害する側の人間でした。そういう人に対してもイエス様は弟子を使って奇跡をおこされ、一瞬のうちにサウロを変えられたのです。イエス様は自分に敵対するものにさえ手を差し伸べてくださるのですから、求めている者の願いは必ず聞いてくださるはずです。たとえこの世の有限の物を見る力、肉体の力は衰えていっても、聖霊に満たされた魂による見る力は全く衰えません。それどころか、ますます強められます。永遠の絶対的な光、神様の栄光を見ることは、誰でもできるのだと思います。そしてこれこそが一番すばらしいものです。イエス様を全面的に信頼し、願いが叶えられることを信じて祈ることができれば、本当のすばらしい光を見つけることができるのではないでしょうか。

「人にはできないことが、神にはできるのです。」（ルカ　18･27）

たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。（2コリント　4･16）

あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。（詩篇　119･105）

死んだらすべてがおしまい、全く無になる、とおっしゃる方が多くいます。でも心底そう思っているのでしょうか。この世の先に何もなかったら、人間のいのちはあまりにも短すぎます。そんな有限の短い人生であるのなら、いったい何に目標を置くのでしょう。そう言いながらも、人は心の奥底では肉体の死後の霊的世界をどこかで漠然と信じ、恐れているのだと思います。自分はどうなるのか分らないから恐ろしいのだと思います。聖書は実にはっきりしています。イエス様を救い主と受け入れた人のゴールは天の御国です。さばきに会うことは一切ありません。そこで永遠のいのちが続くのです。この約束、確信があるからこそ、私たちはこの世の短い人生を患難さえも益として、喜びをもって充実して過ごすことができるのだと思います。天国はきっと愛と聖霊に満ちあふれた場所でしょう。そこではもう何の心配も苦しみも、盲目もすべての病気もないのです。

私たちの国籍は天にあります。（ピリピ　3･20）

彼らはもはや、飢えることもなく、渇くこともなく、太陽もどんな炎熱も彼らを打つことはありません。なぜなら、御座の正面におられる小羊が、彼らの牧者となり、いのちの水の泉に導いてくださるからです。また、神は彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださるのです。（黙示　7･16、17）

神様のみことば、聖書の中には特効薬がいっぱいあります。たくさん食べても副作用はありません。効果と益、そして愛だけです。

中込豊
略歴／医療法人･社団･聖愛会　中込眼科院長
山梨県出身　増穂中学、巨摩高校、富山医科薬科大学医学部卒、日本医科大学第一病院眼科医局長などを経て現職





イエスさまのお話を聞いても、喜びが感じられない人はいませんか。イエスさまを身近に感じられないという人はいませんか。このような悩みを解決するためには、どうしたらよいのでしょうか。

聖書には、イエスさまから大きな喜びをいただいた、ある人のことが記されています。

①ありのままで

ペテロとヨハネは午後三時の祈りの時間に宮に上って行った。すると、生まれつき足のきかない男が運ばれて来た。この男は、宮にはいる人たちから施しを求めるために、毎日「美しの門」という名の宮の門に置いてもらっていた。彼は、ペテロとヨハネが宮にはいろうとするのを見て、施しを求めた。ペテロは、ヨハネとともに、その男を見つめて、「私たちを見なさい。」と言った。男は何かもらえると思って、ふたりに目を注いだ。（使徒　3･1～5）

この人は毎日、施しを求めて門の前にいました。ペテロが「私を見なさい。」と言った時も、何かもらえると思って目を注ぎました。イエスさまのことが知りたかったからではありません。何か恵んでもらえるかもしれないと思って、使徒たちの方を見たのです。最初のきっかけは、施しを求めるためでした。

②こころをひらいて

男は何かもらえると思って、ふたりに目を注いだ。すると、ペテロは、「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい。」と言って、彼の右手を取って立たせた。するとたちまち、彼の足とくるぶしが強くなり、おどり上がってまっすぐに立ち、歩きだした。（使徒　3･5～8）

この人は、イエスさまがペテロを通して言われたお言葉を、心の窓を大きく開いて聞きました。そして、そのまま素直に受け入れました。その結果、彼は歩けるようになったのです。私たちもこの人と同じように、心を開いてみことばを受け入れるなら、大きな喜びをいただくことができます。

③さんび すること

そして歩いたり、はねたりしながら、神を賛美しつつ、ふたりといっしょに宮にはいって行った。（使徒　3･8）

足がなおったこの人は、おどり上がってはねたりしながら神様を賛美し、宮にはいっていきました。そして、ペテロやヨハネといっしょに神様を礼拝しました。私たちもこの人のように、心を大きく開いて喜んで礼拝することができたら、どんなにすばらしいことでしょう。

④イエスさまから あたえられる しんこう

この人が、ペテロとヨハネにつきまとっている間に、非常に驚いた人々がみないっせいに、ソロモンの廊という回廊にいる彼らのところに、やって来た。ペテロはこれを見て、人々に向かってこう言った。「イスラエル人たち。なぜこのことに驚いているのですか。なぜ、私たちが自分の力とか信仰深さとかによって彼を歩かせたかのように、私たちを見つめるのですか。……このイエスの御名が、その御名を信じる信仰のゆえに、あなたがたがいま見ており知っているこの人を強くしたのです。イエスによって与えられる信仰が、この人を皆さんの目の前で完全なからだにしたのです。」（使徒　3･11、12,16）

ここに記されているように、ペテロやヨハネの信仰、そして、美しの門にいた人の信仰も、自分の努力によるものではなく、イエスさまが与えてくださった信仰です。

キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。……そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。（1ペテロ　2･22、24）

聖書が言っている罪とは、私たちのわがまま、自己中心な生き方のことです。「私はわがままではない。自己中心ではない。」と言える人は、ひとりもいないと思います。イエスさまは、このような私たちの罪を身代わりに負われ、十字架上で死んでくださいました。尊いみわざを心から感謝し、罪を悔い改めてイエスさまを仰ぎ見る人は、誰でも、イエスさまが与えてくださる信仰によって、心から喜ぶことができるのです。

これまで、「イエスさまのお話を聞いても喜びが感じられない。イエスさまを身近に感じられない。」という悩みの解決法について、聖書から考えてきました。まとめると、次のように言うことができると思います。

素直になって、ありのままの姿でイエスさまの前に出ること。十字架上で私たちの罪の身代わりに死んでくださったイエスさまを、仰ぎ見ること。自分の努力によるのではなく、イエスさまが信仰に導いてくださることを確信すること。そして、心からの礼拝と賛美をイエスさまにささげることです。

私たちの罪のために十字架で死なれ、よみがえられ、今も生きて、共に歩んでくださるイエスさまを見上げる時にだけ、信仰の喜びが与えられるのです。

わたしは主によって大いに楽しみ、わたしのたましいも、わたしの神によって喜ぶ。（イザヤ　61･10）

サンビ スルコト

重田　洋
略歴／郵船情報開発(株)
勤務、新潟県出身、
小出中、小出高、
青山学院大文学部卒

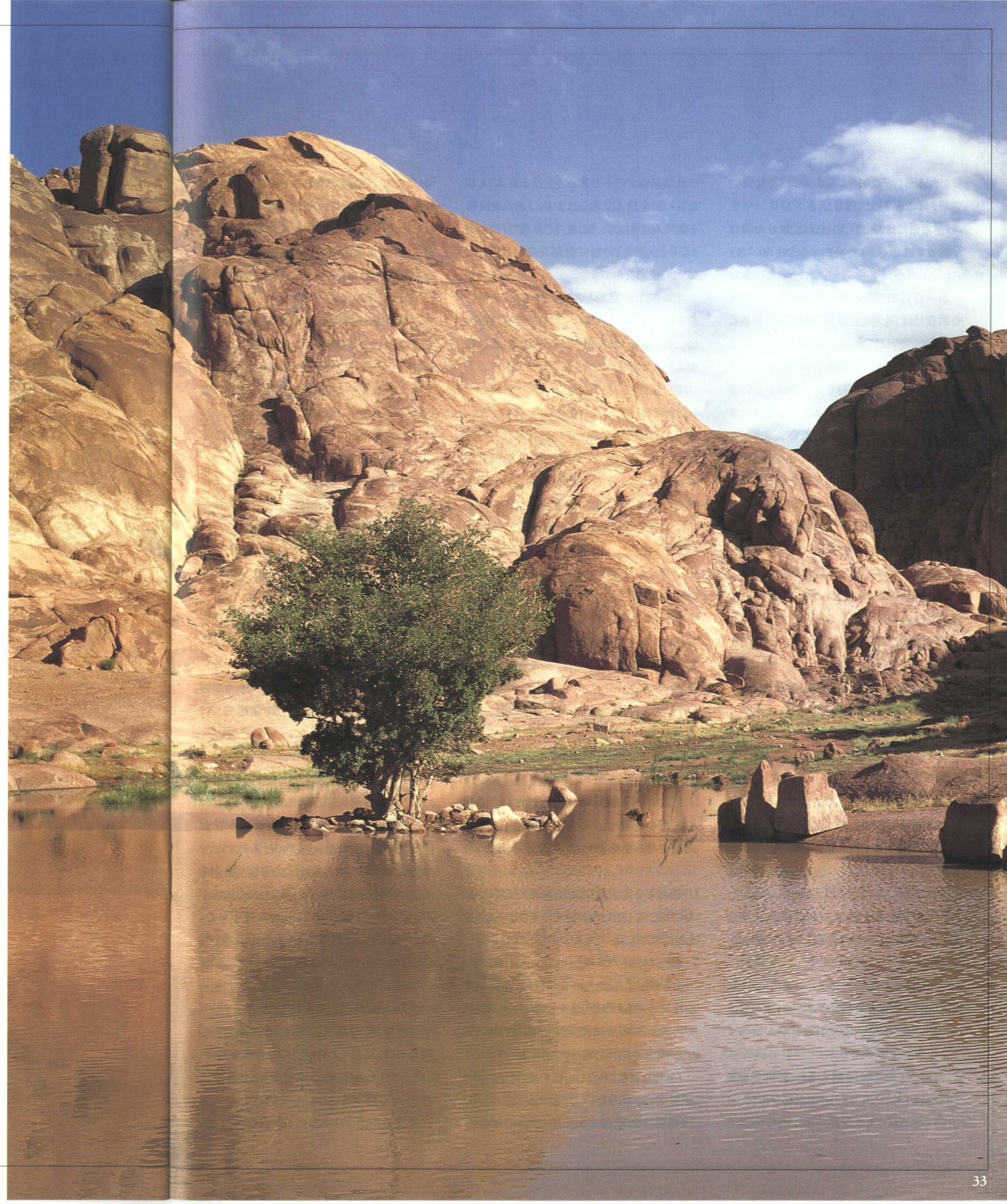


［モーセの十戒］5

神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック

1それから神はこれらのことばを、ことごとく告げて仰せられた。
2「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。
3あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。
4あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。
5それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、
6わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。
7あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。主は、御名をみだりに唱える者を、罰せずにはおかない。
8安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。
9六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。
10しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはどんな仕事もしてはならない。—あなたも、あなたの息子、娘、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、また、あなたの町囲みの中にいる在留異国人も。—
11それは主が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にいるすべてのものを造り、七日目に休まれたからである。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された。
12あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が与えようとしておられる地で、あなたの齢が長くなるためである。
13殺してはならない。
14姦淫してはならない。
15盗んではならない。
16あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。
17あなたの隣人の家を欲しがってはならない。すなわち隣人の妻、あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない。」（出エジプト 20・1〜17）



これから、十戒の中の第一の戒めについて考えてみることにしましょう。

「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。」（出エジプト 20・3）

第一の戒めから第四の戒めまで、これら四つの戒めは、全体として一つのものを形成しています。それは「人間と神との関係」です。そしてこれこそが、人生の土台です。人間は、本来神に依存する存在であり、神と正しい関係を持たなければなりません。このことは、強調しても強調しすぎることがない大切なことであり、これについて私たちは、はっきりとした認識を持つ必要があります。

人間と神との関係によって、人間のすべての生活、あらゆる行ない、あらゆる言葉、あらゆる考えが規定されます。どのような問題であっても、聖なる神のみこころにかなった者として、神との正しい関係がなければ、問題は決して解決されません。

個人生活、市民生活、そして国民対国民の関係などすべては、神との正しい関係、神の戒めに基づいた関係にある時にのみ、正しい状態に置かれるのです。

主がくだされた第一から第四の戒めは、全体として一つの大切な戒めにまとめられます。

「聞きなさい。イスラエル。主は私たちの神。主はただひとりである。心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」　（申命記 6・4、5）

この部分の後半節は、イエス様も、大切な第一の戒めとして示されました。（マタイ22・37参照）

人間は、人間のために造られたのではなく、主なる神のため、主を愛するため、主に仕えるために造られました。これこそが人間のすばらしい使命です。

他のいかなる被造物からも、神は愛を要求なさいませんでした。創造主なる神が、被造物である私たちを服従させようとなさるなら、それは当然のことですが、主はそれよりも私たちの愛を望んでおられます。「あなたは神を愛するべきです。」これこそ私たちの心、たましい、気持ち、そして全存在に向けられた最大の戒めなのです。

主なる神は、私たちのまったき愛、心からの愛を望んでおられます。主なる神の心は神の姿に似たものとして造られた被造物、人間の愛を望んでおられます。主なる神に対するすべてを投げ打った愛こそ、ほんとうの幸せ、まったき満足、喜び、自由なのです。

私たちの主なる神への愛は、私たちの生活の土台、私たちの行為の推進力、そして私たちの行ないの目標となっているでしょうか。私たちは、たとえ他の戒めを破らなかったとしても、この最も大切な戒めを破ったことを認めざるをえません。主なる神の痛みは、私たちが全身全霊を持って神を愛さないことであり、これこそが私たちのすべての悩みの原因であり、生けるまことの神に対する心からの献身が欠けるという結果をもたらすのです。少しばかり心を静め、神のことばに耳を傾けましょう。

「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。」（出エジプト 20・2）

そこで、イエスは彼に言われた。「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」（マタイ 22・37）

私たちを愛し、ご自身を捧げてくださった主に対して、私たちは愛さないではいられないはずです。

私たちが主なる神との正しい関係を持っているならば、私たちの全生涯は、神に対する礼拝そのものとなります。第一から第四までの四つの戒めは、人間の一生が、神に対するまことの礼拝であるべきだと言っています。

「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。」（出エジプト20・3）という第一の戒めは、「礼拝の内容」を示し、**「あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。」（出エジプト20・4）**という第二の戒めは、「礼拝のあり方」を特徴づけ、**「あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。」（出エジプト20・7）**という第三の戒めは「礼拝の危険」を警告します。**「安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。」（出エジプト20・8）**という第四の戒めは、「礼拝の特別の時」を定めます。

第一の戒めは、人間のもっとも深い内面をさぐり、まことの礼拝の内容を定めます。「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。」また、「わたしこそ、主である。わたしだけが主である。」

これこそ、すべてのまことの礼拝の土台です。ただひとりの最高のお方の他に、別の存在を並べて考えることはできません。

イスラエルの民に対する神の厳しい教育の目標は、唯一の神への礼拝に、彼らを導くことでした。

「聞きなさい。イスラエル。主は私たちの神。主はただひとりである。」　（申命記 6・4）

人間は誰でも「にせ者の神」を持ちたがります。つまりそれは、まことの神の代わりに、私たちの心を奪うほど魅力的な何かです。

人間がどのような神を信じるかということは、どうでもいいことではありません。人間が思いつくままに生み出した何百とある神々の中の一つの神を信じても、それはまったく意味がありません。聖書の中にご自身を啓示してくださった、「生けるまことの神」だけが、唯一まことの神でなければなりません。

主なる神は、ご自身を**「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」、「イスラエルの聖なる者」、「主イエス・キリストの父なる神」、「唯一のまことの神」、「生けるまことの神」**とおっしゃいました。

異邦人があがめる神々の名前は、決して聖書の神についての別の呼び名などではありません。別の名前とは、別の神々にほかなりません。

神ご自身は、ご自分のお名前に、言い表わすことのできないほど、大きな価値を置いておられます。

神はモーセに仰せられた。「わたしは、『わたしはある。』という者である。・・・これが永遠にわたしの名、これが代々にわたってわたしの呼び名である。」　（出エジプト 3・14、15）

「この光栄ある恐るべき御名」　（申命記 28・58）

ただひとりのまことの神が存在するように、まことの名前もただひとつだけ存在しています。

主は地のすべての王となられる。その日には、主はただひとり、御名もただ一つとなる。　（ゼカリヤ 14・9）

主なる神は、バアルと混同されることを決して望まれませんでした。主なる神は、イスラエルの民がバアルを礼拝することを拒まれました。そして主のしもべエリヤを遣わし、イスラエルの民が「まことの神」か、バアルかのどちらかをはっきりと選ぶように命じられたのです。

エリヤはみなの前に進み出て言った。「あなたがたは、いつまでどっちつかずによろめいているのか。もし、主が神であれば、それに従い、もし、バアルが神であれば、それに従え。」　（I列王記 18・21）

「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。」あなたはこの神の戒めを守ったのでしょうか。あなたの神はいったい誰ですか。あなたの心は、何によって奪われているのでしょうか。あなたの人生の内容は何でしょうか。

それはお金ですか。あなたの人生は、お金を追求することによって特徴つけられるのでしょうか。あなたは貯めたお金で満たされているのでしょか。それはいっぺんにあなたの手元から無くなってしまうこともありえます。あなたが世界一のお金持ちになったとしたなら、それは生けるまことの神の代わりになりうるのでしょうか。

主イエス様は、次のように言われました。

「あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」　（マタイ 6・24）

また今日、何と多くの人たちが、仕事の奴隷となり、がんじがらめにされてしまい、人生は仕事だ、と思い込んでいることでしょうか。心はからっぽでむなしく、家族は省みられず、子供たちは自分勝手な道を行ってしまい、すべては偶像である仕事の犠牲になってしまっています。そのような人生は、「砂上の楼閣」、つまり砂の上にお城を建てるようなもので、まったく基礎のない、むなしいものです。多くの人の人生は、次のようなものです。

あなたが叫ぶとき、あなたが集めたものどもに、あなたを救わせよ。風が、それらをみな運び去り、息がそれらを連れ去ってしまう。　（イザヤ 57・13）

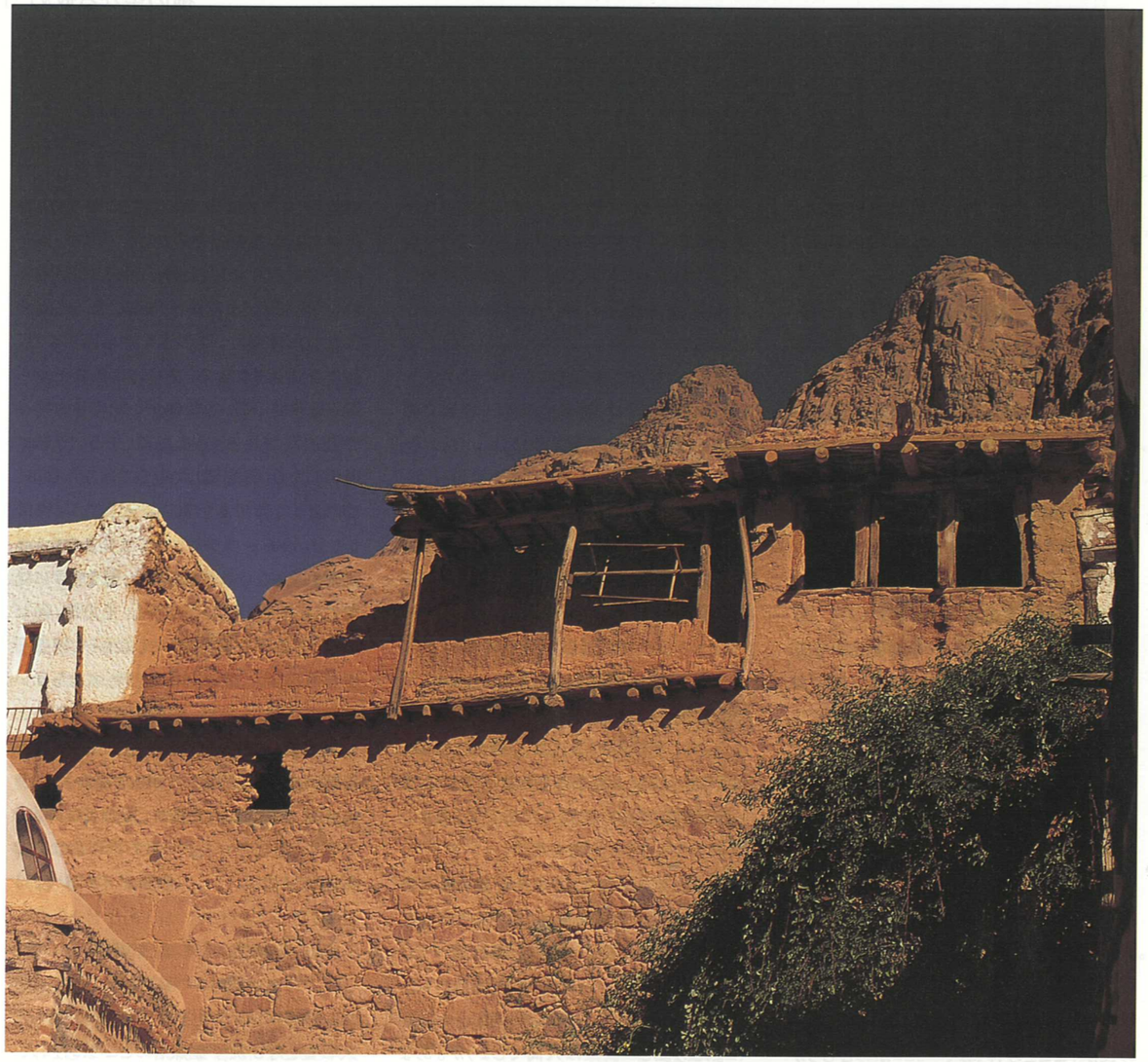
またあなたの偶像は人間でしょうか。あなたの夫、妻、子供、友達、恋人、あるいは、あなたを導いてくれた人でしょうか。その人なしには、あなたは生きていくことができないような人、あなたの心を占めている人、あなたの「神」に相当する人がいるのでしょか。もしいるとすれば、それはあなたの偶像です。あるいは、あなたは他の人から偶像にされることを良しとするのでしょうか。私たちは、神の代わりになろうと大胆な思いを持つならば、わざわいです。偶像崇拝は、もっとも恐ろしい罪であり、主なる神は、もっとも忌み嫌うものです。イスラエルの民の中で偶像崇拝を行なったり、させたりした人は、石で殺されなければなりませんでした。

あなたと母を同じくするあなたの兄弟、あるいはあなたの息子、娘、またはあなたの愛妻、またはあなたの無二の親友が、ひそかにあなたをそそのかして、「さあ、ほかの神々に仕えよう。」と言うかもしれない。これは、あなたも、あなたの先祖たちも知らなかった神々で、地の果てから果てまで、あなたの近くにいる、あるいはあなたから遠く離れている、あなたがたの回りの国々の民の神である。あなたは、そういう者に同意したり、耳を貸したりしてはならない。このような者にあわれみをかけたり、同情したり、彼をかばったりしてはならない。必ず彼を殺さなければならない。彼を殺すには、まず、あなたが彼に手を下し、その後、民がみな、その手を下すようにしなさい。彼を石で打ちなさい。彼は死ななければならない。彼は、エジプトの地、奴隷の家からあなたを連れ出したあなたの神、主から、あなたを迷い出させようとしたからである。イスラエルはみな、聞いて恐れ、重ねてこのような悪を、あなたがたのうちで行なわないであろう。　（申命記 13・6～11）

また、多くの人々たちは、悪魔を自分の神としました。占い師のところに行く人、口寄せのところに行く人、手相を見てもらう人、死んだ人の霊を呼び戻す霊媒者のところに行く人、こういう人たちは、自分の人生の支配権を悪魔に渡してしまい、悪魔の支配の下にいることになります。こういう人々は悪魔を恐れるようになり、したがってその人の将来は暗黒となります。

主は私たちに命令されました。**「あなたには、わたし（主）のほかに、ほかの神々があってはならない。」（出エジプト20・3）**ですから、ただ単に、主の代わりにほかの神を拝んではならないというだけではなく、主のほかに、主と並んでほかの神を拝むようなことをしてはいけないのです。「神」＝「何かほかのもの」は偶像礼拝です。主なる神は、あなたの心の中心に置かれる王座を、誰かといっしょに分けることなど決してお赦しにならないのです。

自分の罪、過ち、妥協のすべてを主に申し



上げ、告白し、全生涯の支配権を主に明け渡しましょう。おそらく聖書の中でも、一番後に書かれた書物のひとつと思われる第一ヨハネの手紙は、非常に厳しい警告の言葉で終わっています。

子どもたちよ。偶像を警戒しなさい。
(Iヨハネ 5・21)

次に、十戒の中の第二の戒めについて、聖書からごいっしょに考えてみましょう。

「あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。」
(出エジプト 20・4〜6)

この第二の戒めは、唯一の神がいらっしゃることを前提条件としています。そしてこれは、主なる神を認識した人たち、神に仕えたいと思っている人たちに与えられたものです。この戒めは、生けるまことの永遠の神に対する礼拝の仕方について書かれています。

「わたしはあなたの神、主である。」「あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。」まことの神に対する礼拝は、神の本質にふさわしいものでなければなりません。

主なる神は目に見えず、わたしたちの感覚でさわることができず、私たちのたましいで理解することができないお方です。ただ聖霊によって、主に生かされた人間の霊にだけ、ご自身を明らかにすることがおできになり、そうしたいと願っておられます。

イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」
(ヨハネ 3・3)

いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。
(ヨハネ1・18)

イエス様は、私たちにも理解できるような人間の形をとって、地上に下ってくださいました。

ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。
(ヨハネ 1・14)

このいのちが現われ、私たちはそれを見たので、そのあかしをし、あなたがたにこの永遠のいのちを伝えます。すなわち、御父とともにあって、私たちに現わされた永遠のいのちです。
(Iヨハネ 1・2)

ただひとり、イエス様を通して、主なる神はご自身を現わしてくださいました。私たちは、イエス様を通して、**「神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われ」**(ヘブル 1・3)を知ることができます。

第2コリント4章6節によって私たちの回心とは何であるかを見ることができます。

「光が、やみの中から輝き出よ。」と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです。
(IIコリント 4・6)

イエス・キリストを通して、私たちは主なる神の本質と姿を知ることができます。しかし、神ご自身を見たり、つかんだり、把握したりすることはできません。ですから、神に対する私たちの礼拝もまた、霊によってされなければなりません。礼拝は、目に見える補助手段、感情的に動かされることや、感覚的なかたちによらず、霊によって行なわれるべきです。

「しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。」(ヨハネ 4・23、24)

「霊によって礼拝する」ということは、「神を目に見える形として現わしてその像に向かって拝む」こととはまったく正反対のものです。

偶像を造って礼拝することは、神の姿を、こっけいな形にしてしまうことです。生まれつき人間は、神に対する礼拝の補助手段として、何か目に見えるものを持ちたがります。人間とは、何かを見たり、感じたり、味わったり、聴いたりしたがるものです。そういった五感で感じられるものによって、何かを崇拝する気持ちや雰囲気を作り出し、それによって崇拝を維持したいと思うのです。

礼拝の対象として、直接目に見える、五感で感じられるようなものを持ちたいという気持ちから、多くのカトリック教会などに見られるような、装飾過多の教会、薄暗い堂内の神秘的雰囲気、ムードを高める典礼音楽、黄金の十字架やキリスト像、マリア像、聖者像などが作られてきました。こういったものは、確かに私たちの五感に訴えかけて情感を動かします。しかし、このような「もの」を、もし礼拝の「対象」とするなら、それは決して「霊によるまことの礼拝」ではなく、「たましいによる礼拝」となり、すべて偶像崇拝になってしまいます。主なる神は、もともと目に見えず、形としてつかむことができません。ですから、その神を、具象物として感覚だけに頼って把握しようとすることはまちがいです。

見たり、聴いたり、実感したり、つまりいろいろな「もの」を通して礼拝するのでなく、そのようなものとは無関係に、「直接、神に対して礼拝する」ことこそが、まことの礼拝です。

まことの神に対して、正しいあり方で礼拝すべきであるという、第二の戒めは、非常に大切です。この大切さを強調するため、主はまちがった礼拝の結果と正しい礼拝の結果を次のように告げておられます。

「あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。」(出エジプト 20・5、6)

礼拝とは何でしょうか。「すべてのことを主のみこころのままにお委ねすること」です。「主の道に自分自身を委ねること」です。まことの礼拝とは、主のみもとにひれ伏すことです。

さて、ヨシュアがエリコの近くにいたとき、彼が目を上げて見ると、見よ、ひとりの人が抜き身の剣を手に持って、彼の前方に立っていた。ヨシュアはその人のところへ行って、言った。「あなたは、私たちの味方ですか。それとも私たちの敵なのですか。」すると彼は言った。「いや、わたしは主の軍の将として、今、来たのだ。」そこで、ヨシュアは顔を地につけて伏し拝み、彼に言った。「わが主は、何をそのしもべに告げられるのですか。」
(ヨシュア 5・13、14)

ヨシュアは神の民イスラエルを、約束の地カナンに導き入れるという大きな使命を持っていました。このことは、モーセが長年かかって成し遂げられなかったことでした。若いヨシュアにとっては、それはさらに困難だったに違いありません。これから攻めようとするカナンには、恐るべき強敵であるカナン人が待ち構えています。また、率いているイスラエルの民は、不平ばかり言っている始末におえない民たちでした。ヨシュアにとっては、まさに内外ともに困難な状態でした。ところがその時、主が現われられたのです。ヨシュアは顔を地につけて伏し拝みました。ヨシュアは礼拝しました。

たとい、私たちの周りに強敵がひしめき、私たちには耐えられない苦しみが襲いかかり、また試みがやって来たとしても、その時、主に助けを叫び求めるだけでは十分ではありません。その時になすべき唯一のことは、主のみもとにひれ伏し、主を崇め、礼拝することです。もし、私たちが主のみもとにひれ伏し、礼拝するなら、私たちのまわりのすべての問題は小さなものになり、重荷から開放されます。礼拝とは、主のみもとにひれ伏すことです。まことの礼拝者は内面的に自由になり、すべてを主に委ねることができますから、安心して将来に向かうことができるのです。

メッセージ当番表（4月— 6月）

「しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。」（Ⅰヨハネ1:7）

私たちは互いに交わりを保ち、

	4月				5月				6月				
	6日	13日	20日	27日	4日	11日	18日	25日	1日	8日	15日	22日	29日
北海道	重田H	川股	中山Y	杉本		加藤S	キャンプ	武井	藤原N	岩崎	野口T	岩下	芳竹
青森		奥		笠井		藤田		福島				中山Ch	
仙台／盛岡		松田	松見	深沢	奥	高田	片桐	北原	立之	蘇畑	川股	菊池	増森
新潟		山下		江藤		富田	鈴木T		野田	笠井		重田H	柿沼M
宇都宮	藤井	谷口	御任	羽石		金井	見目	谷口	見目	野田	吉田	御任	鈴木H
日立／土浦／大洗	羽石	南村	平山	和田S	松田	柿沼Y	松見	藤田	槙野	後藤	上村	石井K	吉田
川越	代田	小野沢	川股	古田K		白石Y	御任	江田	野口T	飯島H	上野	内藤	大庭
春日部	川股	藤井	小々馬	鈴木H	西村	御任	川股	大庭	宮田	野口O	会沢	辻	小西
印旛／鹿島	岩崎	会沢	笠井	松尾		槙野	染野	伊牟田	滝	末村	小西	小川	山口I
市川	大場	田中J	滝	黒沢	小西	小川	岩崎	会沢	田尾	飽戸	鈴木T	小島	大沢
東京 10:20	野口O	平山	野田	飽戸	白石K	池田D	辻田H	菊池	酒井Ch	藤本	重田S	青柳	古田K
東京 14:00	小島	近森	藤田	松見	富岡	岡本M	石塚	古田稔	河辺	岩本	染野	江藤	蘇畑
東京 19:00	黒沢	辻	大須賀	古屋	久田	中山Ch	中村K	野口H	柿沼Y	旭	佐山	田中J	小々馬
横浜	田中J	北原	酒井M	小川	兵藤	立之	松田	山田K	柿沼M	菊池	寺田	黒田	中山Ch
相模原	江藤	神沢	石井A	加藤S	飽戸	代田	菊池	旭	牧野	内藤	山田K	立之	酒井M
御代田	若山	キャンプ	末永	片桐	キャンプ	長岡	織田	小島	羽石	平井	植原	飽戸	岩崎
伊那	末永	キャンプ	若山	田中J	キャンプ	片桐	長岡	織田	植原	山田M	小野沢	平井	清水Y
富山	吉田	大下	柿沼Y	青柳		仲井間	富田	長岡	平	キャンプ	山下	野口O	酒井Ch
藤枝	今川	内藤	金子	野田		芝田	酒井M	染野	菊池	武井	白石Y	小林	平山
掛川	辻田H	酒井M	今川	秋本		神沢	大塚	青柳	飽戸	石塚	岩上	染野	大塚
蒲郡	野田	小西	岩本	新井	三五	会沢	河辺	辻田H	倉橋	清水N	清水Y	白石Y	大高
名古屋／豊橋	酒井M	那須	今村	山科	新井	和田Y	会沢	津田	辻田H	田中J	今川	上田	松本S
石川／福井	植原	和田Y		重田S		伊牟田		重田S		キャンプ			重田S
近江八幡			古田K				青柳			吉田			
大阪	キャンプ	植原	岩崎	酒井Ch	内田	森島	池島	渡辺S	大場	広田	中山K	寺田	山科
芦屋	キャンプ	青柳	伊牟田	吉田	藤原T	瀬島	野口O	新井	森島	小久保	池島	中山K	長岡
西神	キャンプ	渡辺S	岡本M	池島	小久保	滝	小川	内田	田中J	久田	森島	渡辺S	小山
島根			福代			キャンプ	森田			瀬島		黒田R	
山口／広島／徳山	山口H	笠井	香川	末永	渡部Y	キャンプ	瀬島	上田	芳我	杉本	岡本M	森田	秋本
岡山	河野	広橋	近森	久田		野間	渡辺S	キャンプ	藤原T	岡本M	後藤	福島	内田H
高松／徳島	山本	岡本M	鈴木T	青柳		笠井	広橋	キャンプ	中山K	野間	大須賀	河野	高島
高知	岡本H	岩崎	飯守	近森		重田S	池田D	キャンプ	金子M	青柳	伊野	池田J	窪内
松山／西条	和田Y	野間	山本	光藤		江藤	近森	キャンプ	白石K	森島	内藤	古田K	広田
福岡／別府	浅野	岩本	松井	庄野		山口H	滝	小山田	中野	古田K	別所	今村	重枝
長崎／佐世保	別所	辻田H	染野	松井		別所	庄野	松井	浅野	辻田M	加藤M	北原	山口H
宮崎／小林	藤原N	上野	河辺	武井		染野	平山	桜本	古田K	岩本	松井	菅原	高橋I
鹿児島／熊本	庄野	江藤	須藤	平山		重枝	羽石	石塚	上野	加藤M	古田M	松井	青柳
沖縄／宮古	重田S	河辺	キャンプ	崎浜		松見	平良M	芳竹	蘇畑	池田D	仲井間	代田	喜屋武
石垣	重田S		キャンプ			喜屋武		古田K		平良M		芳竹	
米国／カナダ				キャンプ				和田Y				古田M	
グアム			古田M			古田M							
バンコク				石井A				平山					
中国													
喜びの集い	5-6	11-13	19-20	26-30	3-5	10-11	17-18	24-25		7-8	17-24		25-7/5
	大阪	御代田	沖縄	バンクーバー	御代田	広島	札幌	松山		富山	ミヘルスベルク		ミヘルスベルク
祈り会（7:30PM～）	3	10	17	24	1	8	15	22	29	5	12	19	26
	野田	重田S	田中J	清水Y	小島	水渡	杉本	芳竹	牧野	佐山	山本	大須賀	和田Y
Ⅱペテロ	3. 14-16	3. 17-18	Ⅰヨハネ1. 1-4	1. 5-10	2. 1-2	2. 3-6	2. 7-11	2. 12-14	2. 15-17	2. 18-19	2. 20-24	2. 25-29	3. 1-3

◆各集いの準備担当者は、参加者リスト（ローマ字の氏名も）を事前にベックさんへEメールで送ってください。アドレスは、gotthold_beck@hotmail.comです。

※Eメールを使えない場合は速達で郵送してください。

2003年 よろこびの集い

※前号掲載の日程に一部変更があります。

4 April
- 5日－ 6日　大阪
- 11日－13日　御代田（ドイツの方々参加）
- 19日－20日　沖縄（ドイツの方々参加）
- 26日－30日　バンクーバー

5 May
- 3日－ 5日　御代田（4日:コンサート）
- 10日－11日　広島
- 17日－18日　札幌
- 24日－25日　松山

6 June
- 7日－ 8日　富山
- 17日－24日　ドイツ（ミヘルスベルグ）
- 25日－7月5日　ドイツ（ミヘルスベルグ）

7 July
- 18日－20日　御代田
- 25日－27日　御代田

8 August
- 1日－ 3日　御代田
- 8日－10日　御代田（10日:コンサート）
- 15日－17日　御代田
- 22日－24日　御代田
- 29日－9 1日　上海

9 September
- 6日－ 7日　石川／福井
- 13日－14日　神戸
- 19日－21日　御代田
- 27日－28日　宮崎

10 October
- 4日－ 5日　八戸
- 11日－12日　未定
- 18日－27日　ドイツ（フィリンゲン）

11 November
- 3日　メサイアコンサート（東京）
- 8日－ 9日　仙台
- 15日－16日　島根
- 29日－30日　新潟

12 December
- 4日－ 7日　上海
- 13日－14日　徳島
- 20日－21日　福岡
- 31日－1月2日　御代田（1日：コンサート）

日程変更などのお知らせ

前号掲載のメッセージ当番表（4月～6月）の一部が修正されています。担当者の海外転勤などのためです。春のドイツキャンプの日程が1日ずれ、八戸キャンプが10月4、5日に変わったこと及び5月末からの上海キャンプの中止も本号で修正されています。このような変更は今後もあると思われます。変更があり次第、集会のホームページ（http://www.christ-shukai.net/）の日曜福音集会メッセージ当番表を手直ししていただく予定です。なお、当番表の石川／福井の項目で、担当者名の横に記入した数字は福音集会の開催日です（日曜に会場を確保できず、前日の土曜に開くものです）。

訂正

4号の筆者の一人、飽戸弘さんの略歴で東京大学文学部卒とあるのは東京大学教育学部卒の誤りでした。お詫びして訂正します。

主を愛さない者はだれでも、のろわれよ。主よ、来て下さい。(Iコリント16:22)
「これらのことをあかしする方がこういわれる「しかり。わたしはすぐに来る。」アーメン。

メッセージ当番表 (7月— 9月)

	7月				8月			
	6日	13日	20日	27日	3日	10日	17日	24日
北海道	重田H	川股	中山Y	杉本	芳竹	加藤S	中山Y	武井
青森		佐山		笠井		藤田		福島
仙台／盛岡	奥	松田	松見	深沢	鈴木T	片桐	高田	須藤Y
新潟		山下		江藤		富田	鈴木T	
宇都宮	藤井	谷口	御任	羽石	川股	金井	見目	谷口
日立／土浦／大洗	南村	羽石	平山	和田S	松田	柿沼Y	松見	藤田
川越	代田	小野沢	川股	古田K	野口T	白石Y	御任	江田
春日部	川股	藤井	小々馬	鈴木H	西村	御任	吉田	大庭
印旛／鹿島	岩崎	会沢	笠井	松尾	伊牟田	大野	染野	槙野
市川	小西	田中J	滝	小川	大場	伊牟田	岩崎	会沢
東京 10:20	重田S	平山	野田	飽戸	白石K	池田D	辻田H	菊池
東京 14:00	小島	藤田	久田	松見	富岡	岡本M	石塚	古田稔
東京 19:00	黒沢	辻	大須賀	古屋	松田	中山Ch	中村K	野口H
横浜	田中J	和田Y	酒井M	黒沢	兵藤	立之	牧野	山田K
相模原	江藤	神沢	石井A	加藤S	飽戸	代田	菊池	旭
御代田	若山	片桐	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ
伊那	植原	末永	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ
富山	吉田	野口O	柿沼Y	青柳	織田	仲井間	富田	松本Y
藤枝		内藤		野田		菊池		石塚
掛川	酒井M		金子		秋本		大塚	
蒲郡	野田	小西	岩本	新井	三五	会沢	河辺	辻田H
名古屋／豊橋	滝	酒井M	今村	山科	新井	田中J	会沢	津田
石川／福井		植原		重田S (26)				
近江八幡		古田K				青柳		
大阪	大場	那須	広田	酒井Ch	内田	森島	小久保	渡辺S
芦屋	羽石	小久保	伊牟田	吉田	滝	瀬島	清水Y	新井
西神	飽戸	渡辺S	岡本M	池島	小久保	滝	小川	内田
島根		福代					森田	
山口／広島／徳山	山口H	笠井	香川	森島	上田	北原	瀬島	渡部Y
岡山	内田H	広橋	近森	藤原T	久田	野間	渡辺S	河野
高松／徳島	山本	岩崎	会沢	広田	青柳	笠井	広橋	後藤
高知	鈴木T	岡本H	飯守	大須賀	野間	近森	池田D	伊野
松山／西条	白石K	野間	藤原N	北原	光藤	江藤	近森	岡本M
福岡／別府	浅野	岩本	松井	庄野	重枝	山口H	滝	小山田
長崎／佐世保	別所	辻田H	染野	松井	辻田M	別所	庄野	松井
宮崎／小林	藤原N	上野	河辺	武井	岩本	染野	平山	桜本
鹿児島／熊本	庄野	江藤	和田Y	平山	石塚	重枝	古田M	加藤M
沖縄／宮古	飯守	河辺	江藤	崎浜	仲井間	松見	平良M	芳竹
石垣	古田K			喜屋武			崎浜	
米国／カナダ								和田Y
グアム			古田M				古田M	
バンコク				石井A	平山			
中国								
喜びの集い			18-20	25-27	1-3	8-10	15-17	22-24
			御代田	御代田	御代田	御代田	御代田	御代田
祈り会 (7:30PM～)	3	10	17	24	31	7	14	21
	野田	重田S	田中J	清水Y	水渡	小島	和田Y	杉本
ヨハネ	3. 4-6	3. 7-10	3. 11-12	3. 13-15	3. 16-17	3. 18-24	4. 1-3	4. 4-6

◆各集いの準備担当者は、参加者リスト(ローマ字の氏名も)を事前にベックさんへEメールで送ってください。アドレスは、gotthold_beck@hotmail.comです。
◆ニューフェイス:　松本康秀(富山)、池田悟(高松)、松下明文(吉祥寺)

主イエスよ、来て下さい。(黙示録22:20)

	9月				
	31日	7日	14日	21日	28日
北海道	中山Y	藤原N	岩崎	中山Y	岩下
青森			大場		中山Ch
仙台／盛岡	増森	立之	蘇畑	川股	菊池
新潟	柿沼M	キャンプ	笠井		重田H
宇都宮	鈴木H	見目	野田	吉田	御任
日立／土浦／大洗	吉田	槙野	後藤	上村	藤田
川越	大庭	岩上	飯島H	上野	内藤
春日部	小西	宮田	野口O	会沢	辻
印旛／鹿島	山口I	滝	末村	小西	小川
市川	大沢	田尾	飽戸	鈴木T	小島
東京 10:20	古田K	酒井Ch	藤本	青柳	野口O
東京 14:00	蘇畑	河辺	岩本	染野	江藤
東京 19:00	小々馬	柿沼Y	旭	佐山	田中J
横浜	中山Ch	柿沼M	菊池	寺田	黒田
相模原	酒井M	松見	内藤	山田K	立之
御代田	長岡	羽石	重田S	キャンプ	平井
伊那	織田	片桐	山田M	キャンプ	小野沢
富山	平	キャンプ	羽石	山下	大下
藤枝			芝田		小林
掛川		染野		岩上	
蒲郡	清水Y	倉橋	清水N	大高	白石Y
名古屋／豊橋	松本S	辻田H	和田Y	今川	上田
石川／福井	重田S (30)	キャンプ			重田S (27)
近江八幡			吉田		
大阪	山科	池島	キャンプ	中山K	寺田
芦屋	長岡	森島	キャンプ	池島	中山K
西神	小山	田中J	キャンプ	森島	久田
島根			瀬島		黒田R
山口／広島／徳山	秋本	芳我	杉本	岡本M	森田
岡山	内田H	鈴木T	岡本M	後藤	福島
高松／徳島	池田	中山K	野間	小野沢	河野
高知	窪内	金子M	青柳	古田K	池田J
松山／西条	広田	和田Y	森島	内藤	古田K
福岡／別府	野田	中野	今村	別所	キャンプ
長崎／佐世保	山口H	浅野	北原	加藤M	キャンプ
宮崎／小林	庄野	古田K	菅原	松井	キャンプ
鹿児島／熊本	須藤T	上野	松井	羽石	キャンプ
沖縄／宮古	青柳	蘇畑	喜屋武	岩崎	代田
石垣		平良M			芳竹
米国／カナダ				古田M	
グアム					
バンコク					
中国					
喜びの集い		6-7	13-14	19-21	27-28
		石川／福井	芦屋	御代田	宮崎
祈り会 (7:30PM～)	28	4	11	19	25
	芳竹	松下	佐山	山本	大須賀
ヨハネ	4. 7-10	4. 11-14	4. 15-16	4. 17-19	4. 20-21

※Eメールを使えない場合は速達で郵送してください。

アンケート★

ご意見、ご感想をお寄せください。

キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」は創刊から1年8ヶ月が経過しました。この間、多くの方々からご協力ご援助をいただきましたこと、厚くお礼申上げます。雑誌の内容その他については、至らぬ点が多々あると思いますし、実際にいくつかのご指摘、ご批判も承っています。そこで、5号を発行した時点で広く皆様のご意見をうかがい、今後の編集の参考にしたいと考えて、以下の要領でアンケート調査を行うことにしました。ご協力をお願いします。

A　雑誌のサイズについて
① 現状(A4)でいい
② バッグに入る大きさ(B5)がいい
③ その他(　　)

B　活字の組み方について
① 現状(横書き)でいい
② 縦書きの方がいい

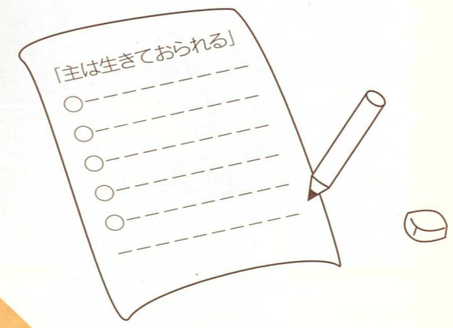
C　誌面の字の大きさについて
① 今の大きさでいい
② もう少し大きい字にした方が読みやすい
③ もう少し小さい字でもいい

D　雑誌の性格について
① 現状(集会の機関紙的な要素と、未信者への福音伝道を兼ねた内容)でいい
② もっと未信者向けの内容にする(証しなどを増やす)
③ その他(　　)

E　その他の意見、感想、提案など、ご自由にお書きください。

回答用紙を添えられませんでしたので、便箋などに書いて下記に郵送してください。締め切りは6月30日とさせていただきます。

〒181-0005　東京都三鷹市中原3－1－55　　清水洋一



今日も生かされ、主を証しする喜び

数々の大きな病がいやされて

国川　雅子

和歌山県出身、西浜中、桐蔭高、大阪女子大卒

今から約4年前、私たちが和歌山に住んでいた頃、私は突然大きな病に襲われました。卵巣ガンの手術中に脳こうそくを併発し、さらに肺水腫で呼吸困難におちいってICU（集中治療室）に入り、生死の境をさまよいました。

あの日から、イエスさまは私を肉体的、精神的、そして霊的な苦悩から救い出して下さいました。

「イエスさまに生かされていることを家族と共に感謝します。私の愛するイエスさまが、いつもそばにいてくださる。今日も一日ありがとう。明日も一日をよろしくね。」

本当につたない詩ですが、私がICUから一般病棟に移されて4日後に、私が語り夫が書きとめた祈りの詩です。イエスさまへの必死の信仰が思い出されて、今でも落ち込んだ時に、悔い改めに導かれて励まされています。

そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。

（1ペテロ　2･24）

生命の危機を脱し、卵巣ガンであることを平安に受け入れる心と、一日も休まずに左手足のリハビリに通う、前向きに明るく生きる力をイエスさまは与えてくださいました。「**よくなりたいか。**」（ヨハネ　5･6）のイエスさまのみことばにしがみつき、多くの集会の方々のお祈りとお見舞いの励ましに支えられ、今日生かされていることを感謝する日々がそこにありました。そして半年間の入院で、抗ガン剤治療は担当の医師も驚くほどによく効いて、がんマーカー値も正常まで下がりました。そしてリハビリも進められて、立つのがやっとの状態から、杖で歩けるところまで回復することができました。



しかし、退院の話を医師から聞いたとき、喜ぶどころか反対に、杖でしか歩けない自分を見てしまって「こんな状態で、家に帰ってどのように生活していったらいいのだろう」という不安と恐れが私の心を占めてしまいました。その後、私はイエスさまから離れて、みことばを読まない、祈らない、自分への劣等感と自己憐憫のため、集会の方々にも心を閉ざしてしまいました。そして精神安定剤を飲まなければ平安に生活できない状態にまで落ち込んでしまいました。

絶望的な闇の中を歩んでいるような状況の中、イエスさまは、娘の友美を通して、私を再び立たせ、イエスさまのもとへ帰るように導いて下さいました。まず、聖歌のカセットテープをかけておけば、一人でいることができるようになりました。そして、「心の中で思っていることを全部イエスさまに聞いてもらえば」と友美に言われ、「イエスさま、この家に帰ってきて何をすればいいのですか?」と大声で叫びました。すると、同じ頃、病気で寝ていた伊田さんが集会の皆さんに便りを書いていらっしゃることを思い出しました。そこで、私も便りが書けるかもしれないと思い、チャレンジしてみました。曲がりくねって真っ直ぐにどうしても書けなかったのですが、やっとのことで何とか一枚書けたときは、とても嬉しかったです。これがイエスさまを証しする便りを書く働きの出発点となりました。また、ある朝友美に、私の聖書を机の上にドーンとおいて「これ、お母さんの聖書でしょう。毎日読んでいたよね。」と言われました。そして右手が自然と動いて開いた箇所が詩篇51篇でした。

神よ。私にきよい心を造り、ゆるがない霊を私のうちに新しくしてください。私をあなたの御前から、投げ捨てず、あなたの聖霊を、私から取り去らないでください。あなたの救いの喜びを、私に返し、喜んで仕える霊が、私をささえますように。

（詩篇　51･10～12）

読んでいるうちに涙がぽろぽろと聖書の上にこぼれおち、心の中に暖かいものが流れ込んできました。「よし。明日からまたみことばを読もう」と決心する強いものが与えられました。それからみことばを読み、便りを書き、祈る生活が始められて、私の心の病はすっかり治り、薬もいらなくなりました。

「**キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたはいやされたのです。**」のみことばにありますように、私の数々の罪がイエスさまの十字架の贖いにより、赦されたことを信じる信仰のゆえに、どんなに苦しい時でも、どのような不自由な状態でも、喜びと平安に満たされ、光の中を歩んでいられる体験をしたことを、心から感謝しています。

あの日からの大きな試練を通して、私の心は砕かれて、自分の弱さと罪深さを徹底的に知らされました。そして自分を捨て、ただイエスさまに従い、日々証しする者へと変えられました。いつも夫とふたりで参加する礼拝、家庭集会や、豊橋、大阪、御代田のよろこびの集いの場で、また毎日の手紙や電話で、イエスさまを証しする喜びが与えられています。

イエスさまが、あの日私を天に召されず、この地上に生かして、この4年間共に歩んで下さいました。これからもみことばを食べ、とりなしの祈りをして、ご再臨のその日まで、イエスさまを証しする働きを、喜んで続けていきたいと願っています。

主に支えられて「介護」と「勤め」を

国川　憲三

三重県出身、文岡中、松阪工高、大阪府立大卒、花王（株）勤務

「お父さーん、お祈りしたから今日も大丈夫よ…」と妻雅子の元気な目覚ましの声で、一日が始められる最近の穏やかな朝が、まるで夢のようです。あの手術の日から約4年の月日は、私の今までの人生の中で、最も波瀾の時になりました。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。　**（ローマ　8･28）**

ICUでの絶体絶命の苦しみから救い出された喜びの3日間、体は不自由ながら明るかった入院生活の6ヶ月、退院して闇の中から光をいただいた和歌山岩出での3ヶ月、東京へ転居し、新しい喜びの生活を続けさせていただいて3年、どの日々も主が常に共におられ、すべてのことを働かせて祝福してくださったことを確信できる日々でありました。

夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。

（エペソ　5･25）

このみことばにありますように、主が私を愛し、私の罪のために十字架でご自身をささげられたことを、今まで以上に感謝するようなり、主の愛と力が与えられて、妻の介護を続けることができるように変えられています。これは主の一方的な憐れみによるもので、それ以前の私では、到底ここまで続けることはできなかったと、主に感謝しています。

妻の大きな病の試練は、介護する私にとっても信仰の試練の時でありました。具体的には「介護」と「勤め」をどのようにしていくかということです。

妻の入院生活6ヶ月間、主の守りと慰めにより1日も倒れることなく、妻を介護しながら勤めを続けることができました。しかし介護のために、突然の休暇や早退が続いたときは、会社に大きな迷惑をかけてきましたことも事実です。上司はじめ職場のみなさんの理解と配慮でなんとか勤めを続けてはいますが、いつまでこれに甘えていてよいものかと正直、思い悩む日々がありました。妻の病状が安定し、元気になるにつれて、それは、救われてからも捨てきれていなかった自己実現の罪の芽が、ときどきもちあがってきたからでした。私は介護と勤めの両立について悩むにつれ、主に必死に祈るようになりました。

すると主は、徹底的に私を砕いてくださる状況に追い込んでくださいました。自分はもう少し仕事ができると自信らしきものを持っていましたが、完全に何もできないことを気付かせてくださいました。そして今まで少しできた仕事も、すべて主から与えられたものであることを知り、はっとして自我の罪を悔い改め、解放されました。

この落ち込みと悔い改めは、何度も繰り返しました。私が落ち込むたびに、元気になった妻が、主のみことばと賛美を喜んで口ずさんでいる様子に、慰められました。まるで私が介護されているようでした。いっそ会社を辞めて介護にうちこめれば、どんなに楽であろうかとまで思いました。妻にもグチをこぼしてしまいましたが、「私はわかりません。イエスさまのところへ行ってください。私は祈っていますね。」と言うだけでした。

そんな時ある兄弟のメッセージテープをきいていたら、「どんな会社の立場、職場環境であっても、それを受け入れることを主が望んでおられ、何か意味があって主がその職場を与えておられる。」とありました。これを主のみ声として、私は重荷を主におろすことができました。

わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。

（ヨハネ　15･16）

介護と勤めのバランスなど自分の力でどうすることもできません。妻の手術前後にまったくお手上げの状態で主にお委ねしたように、勤めのことも主にすべて委ねる信仰が与えられました。

3年になろうとしている東京での職場は、むしろ今まで以上に厳しい状況になっています。しかし、なぜか平安にこのように率直に職場のことも証しできるようになったのは、確かに主が導いておられることを感じています。またこんな不信仰な者にでも、主は勇気と愛を与えてくださり、職場で主の働きをさせていただいています。そのひとつとして、みことばと主の証しを年賀状に書いて、職場の皆さんに出すことができました。そして退職された先輩方には、ヘンデル作曲「メサイア」のCDや「光よあれ」の本を送ることができました。これらのことも妻の試練があったゆえに、主が信仰を増し加え祝福してくださったことであり、主が私をこの職場に選んで任命されたことを信じ、感謝できるようになりました。

このように、妻の大きな病の試練を通して、私はより主に近づけられ慰められ、信仰も新しくされています。

こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができるのです。

（2コリント　1･4）

このみことばに励まされて、慰めの神、イエスさまを述べ伝える主の働きを、妻とふたりでさせていただきたい、主のために生かされたいと祈り願っております。

苦しみに会ったことは、しあわせでした

斎藤　泰子

1969年東京に生まれる。多摩市立東愛宕中、東京純心女子高、恵泉女学園大卒。現在、サーヴァンツインタナショナル（株）勤務。家族は、父 行生（ゆきお）さん、母 昌子（まさこ）さん、妹 裕子（ゆうこ）さん。

私は両親のもと、ふたつ上の姉と、ふたつ下の妹の三人姉妹の次女として育ちました。両親はクリスチャンでしたが、私たちが生まれてからは家族そろって教会に通うことはほとんどありませんでした。ですから私は、神様という偉大な存在は物心ついた時から意識していましたが、自分のために命を捨ててくださったイエス様のことは、まったく知りませんでした。

そんな私たち家族が、本当の意味で救い主であるイエス様と出会い、天国への確信をいただくようになったきっかけは、私たち家族に与えられた大きな試練を通してでした。それは、最愛の姉が天に召されたのです。私が14歳、姉が16歳になったばかりの時のことでした。私にとって衝撃的で、信じられないほど深い悲しみを負う経験でした。けれども、私の人生の中で与えられたこの出来事は、他の誰よりも私を深く愛してくださっている主イエス様によって起こされたことでした。私を愛してくださる方が一体なぜ、耐え難いほどの深い悲しみを与えられたのでしょうか。なぜ、私を絶望させるようなことをなさったのでしょうか。なぜ、大きな悩みもなく楽しく幸せだった毎日を、私から奪われたのでしょうか。それで、本当に愛してくださっていると言えるのでしょうか。それは絶対にあり得ないことのはずです。でも、主はなさったのです。

主がそのようなことをなさったのは、そのようなことをなさってまで得る必要のある、大切なものをくださるためでした。また、主と出会い、イエス様を唯一の救い主とし、主だけに信頼し、主だけのために生き、主だけを見上げて歩む人生へと、変えてくださるためでした。

当時の、私の姉に対する尊敬と信頼は絶大なもので、姉の後をついて行けば間違いないと思っていました。そんな姉の思いがけない死（拒食症による心不全）は私にとって、あまりにも突然で、あまりにもあっけないものでした。「人の命って、いったい何なのかしら。」と思いました。そして、「こんなに簡単に死ぬものなら、人が苦しんだり楽しんだり、喜んだり悲しんだりしながら何十年も生きていくのは、何のためなのでしょう。」この問いが、私にとって避けて通ることのできない重大な問題となりました。

私たち家族が、吉祥寺キリスト集会へ導かれたのはその時です。姉のクラスにキリスト集会にご家族で集っておられる方がいらっしゃり、紹介してくださったのです。集うようになるとすぐ、母は、おそらく初めて、本当の意味で主と出会い、信仰が生きたものに変えられたようです。

しかし私は、当時はまだイエス様を個人的に知ることはなく、否定こそしませんでしたが、イエス様を助け主とは思えませんでした。また、主の私に対する愛も知りませんでしたので、正直なところ、「イエス様のことを知らなくても、集会に導かれなくても、姉が生きていてくれた方がずっと良かった。」と思っていました。当時の私にとっては、よく知らない遠い存在のイエス様よりも、姉の方がずっと必要で大切な存在だったのです。

このような日々は、私にとって非常に辛く苦しいものでした。高校生になっても、私の願いといえば、「姉に会いたい」ということだけでした。 抱えていた大きな問題の答えも見つけられず、また、心に痛みを負ったまま人前では普通に振舞うことは、大変な努力を要しました。神経がすり減り、こんな人生があと何十年も続くのかと思うと、ぞっとしました。

大学2年生の夏のことですが、御代田で、ベックさんと個人的にお話をする機会がありました。私は、「私が生まれる約2千年も前に、イエス様が私の罪の身代わりとなって十字架にかかって死んでくださったと言われても実感がないし、ピンときません。」と申し上げました。するとベックさんは、「理解できることではないし、ピンとくるものでもない。でも聖書に書いてあるから本当のことだから、そのまま受け入れればいいんだよ。」と言ってくださったので、その時から、聖書に書かれていることはすべて事実として、そのまま受け入れるようになりました。またこの時、「ここには私を救い出してくれるものが確かにある」という確信を得ることができました。

ところが、どんなに祈り願っても、すぐには救われているという確信を得るには至りませんでした。そして当時は、「私の祈りは聞かれない。こんなに祈っているのになぜ?」と思っておりました。イエス様が私にとって救い主、あらゆる状況の中からの助け主となるためには、ある経験が必要だったのです。それは、自分が「本当にだめな者だ」ということを知ることでした。

見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。

（イザヤ　59・1、2）



ドイツよろこびの集いに参加した折に



左から、父 行生さん、母 昌子さん、泰子さん、妹 裕子さん

このみことばにあるように、主が御手を伸ばしてくださらなかったのではなく、私自身が差し出してくださっている御手を私の方が拒んでいたのです。そんなこととは、まったく気付きませんでしたが、主に助けていただくには、まず、自分の力を頼りにすることをやめる必要があったのです。

大学3年生のある日、心身ともに疲れ果て、保健室のカウンセラーを尋ねました。そこで自分の問題が解決されると思ったわけではありませんが、「もう限界」という状態でしたので、仕方なくとった方法でした。そのカウンセラーの先生に、「私は自律神経失調症だと思います。」と言いました。自分の身体の状態だけを話すと、薬を出されました。ごく微量の安定剤で、「乗り物の酔い止めと同じ種類のものだから心配はいらない」と言うことでしたが、薬を勧められたことに、私はとても驚きました。そのカウンセラーの先生は精神科医だったのです。戸惑いましたが、相談にのっていただいて従わないことはできなかったので、指示どおり、しばらく薬を服用してみました。初めて薬を飲んだ時は、さすがに涙が出ました。なぜなら、風邪や発熱などの肉体的症状のためではなく、心の傷のせいだとわかっていたからです。自分の精神的な弱さを理由に薬を飲むということは、私にとって受け入れ難いことでした。

薬を飲むとすぐ、良く眠れるようになり、徐々に体力も回復し、心身ともに元気になっていきましたが、薬によって元気になれたということに、私は信仰者として後ろめたい思いを抱いておりました。また、「なぜあんなに祈っていたのに、私はイエス様の力で元気になれなかったのかしら。」と疑問に思いました。けれども、これは私には必要な経験だったのです。なぜなら、私は薬を飲んだことによって初めて、主なる神様の御前に完全に敗北者であることを認め、白旗を揚げることができたからです。

私はずっと、秀でた人間でなくてもいいから人並みの普通の人でありたいと望んでいました。どんなに辛くても高校3年間を通い通すことができたのも、登校拒否児にはなれなかったからではないかと思います。

人並みの人でありたい、というこの思いは、一見当たり前の要求のように思えますが、裏を返せば、人並みの人以下には決してなりたくない、という思いに他なりません。主は、私のそんな傲慢をお見逃しにはならず、私の隠れたプライドに目を留めて、それを砕いてくださったのです。このプライドこそが、私と主との関係の邪魔になっていたからです。これは後になって分かるようになったことなのですが、このことを通して、私は主が自分でも気付かないような心の奥の隠れた思いもすべてお見通しで、その人その人に応じ、最も的確な方法で、巧みに光の中へ導き出してくださるお方であることを知り、主を恐れ、ほめたたえるようになりました。また、私をさばかず、そのますべて受け入れてくださる主の愛によって、自分で定めていた基準以下の人間となった自分を、私自身もまた受け入れることが出来るようになりました。

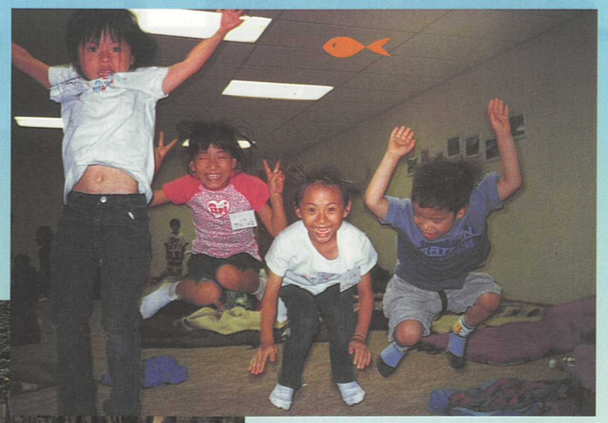
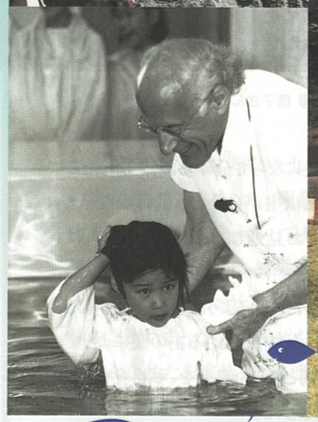
ベックさんと話した翌年、福音センターの献堂式の際に受洗に導かれました。受洗後は、たくさんのみことばが私の内に入ってきて、みことばが私の支えとなっていきました。特に社会人になってからは、自分ではどうすることもできない問題が次々と与えられましたが、自分の力で立ち向かうのではなく、主の御前に静まって祈り、全幅の信頼をおいて委ねれば、どのような問題も必ず勝利を得ることができることを、経験を通して学ばせてくださいました。そして次第に、私のただ一人の相談相手はイエス様となっていきました。正しい知恵を与えてくださるのも、辛いとき本当に私を励ましてくださるのも、また、選択すべき道に迷った時、選ぶべき道を示してくださるのもすべてイエス様です。主は、聖書のみことばを通して、集会の方々のメッセージや証しやお話を通して、いつも語ってくださいます。

主のものとされ、光の中に置かれていると、それとは対照的な自分の心の内が明るみに出されます。それは、主によって指摘されなければ恐らく一生、気付くことのなかった自分の醜さであり、他人に対する愛のなさです。聖書に記されているとおり、「**みじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない（黙示　3・17）**」身のほど知らずの者であることを、日々示されます。この私の罪の性質のゆえに、イエス様は十字架にかからなければならなかったのです。そしてこの犠牲の贖いによって今、私に平安が与えられています。

私は今、はっきりと言うことができます。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。（詩篇　119・71、72）

主よ。今、私は何を待ち望みましょう。私の望み、それはあなたです。　（詩篇　39・7）


あおぞら

いま、そこにある危機

子どもたちは、小さければ小さいほど、うたがうことなく「イエスさま、だいすき!」と言うことができます。

でも「イエスさま、だいすき」な、みんなのまわりには、悪魔もよってきます。ときには、楽しそうな誘惑をとおして。ときには、つらいことをとおして。

おとなも子どもも変わりなく、天国にいくその日まで、この地上では、戦いがあります。

そんな「ごく身近にある危機」を経験した子どもたちから、証しがとどきました。2回にわけてご紹介したいと思います。

しんぱい の ない子

R君には、おともだちがおおぜいいます。ユーモアばつぐんのR君は、日曜学校でも人気者でした。しつもんにも積極的にハキハキと、自分なりの意見を言うことができます。そんなR君は、あまり心配のない子に見えました。お母さんにとっても、それは同じだったようです。イエスさまにあってすくすく育っていると、安心しきっていたのです。

そんなとき、R君のクラスで「学級崩壊」という大きなできごとが起こりました。

学級崩壊

あまり聞きなれないことばかもしれませんが、「学級崩壊」は今、日本の学校の中で深刻な問題の一つになりつつあります。

R君自身に、「学級崩壊」の始まりについて聞いてみました。

「さいしょは、S君っていう子がきっかけだったと思う。S君は小さいけど、つよいの。毎日、先生に反抗していて、先生は弱いから、S君に負けちゃう。それで、ますます図に乗って。みんなも影響されて、ぜんぜん言うことをきかないようになって…。」

「あなたは、どう思っていたの?S君について。」

「S君は、つよすぎるから、みんなから嫌われてると思う。でも、こわいから、何も言えない…。」

「先生に対しては?」

「う〜ん。せんせいのことは、正直、なめてたかもしれない。弱すぎるから…。」

つみ の せいしつ

わるい影響というのは、みるみるうちに広がるものです。R君のクラスも、あっというまに収拾がつかない状態になっていきました。授業中、大声でしゃべったり、手紙を回したり、ゲームをしたりして遊んでいる友達。R君も、楽しい方に流されてしまったのです。

そのことを知ったR君の家族は、必死に祈りました。お母さんは、学校やPTAの許可が得られなくても、自分から学校に出かけていったそうです。すると、授業中にもかかわらず校庭でサッカーをしているR君と目があったそうです。R君は、一瞬ギョッとした顔をして、目をそらしました。まさかお母さんが、いきなり学校に乗り込んでくるなんて、思ってもみなかったからです。

お母さんの あかし

お母さんは、こんな風におっしゃいました。

「小さいころから子どものことはわかっているつもりで、自分が育てているつもりでした。精一杯努力して、『この子たちをよい子に育てるのは、私だ!』と…。子どもの道に目を配って、悪い道に行きそうになったらストップをかけようと思っていたのです。3年生までは、順調に育ちました。良い子だったのです。学級崩壊のときも、『Rだけは大丈夫』と思っていたのに、どんどん加害者になり、悪くなるわが子を見て、自分の無力さを思い知らされました。日々イエスさまにお頼りしようと思いつつ、『私が』『私が』と自我が出てきます。集会に行くとイエスさまの愛につかって悔い改めますが、すぐまた戻ってしまいます。罪に打ち勝つことができない私の姿は、Rの姿そのものです。」

R君「お母さんだって悔い改めるけど、それから3時間くらいで、すぐまた怖くなるよね(笑)」

このお話は、ハッピーエンドではありません。結局、担任の先生が辞められて、学級崩壊そのものは、おさまりましたが、苦い根は、いつまたどんな方法で子どもたちを誘惑してくるか、わかりません。

おばあさんのお話

R君のおうちは、クリスチャン・ファミリーです。おじいさん、おばあさんもイエスさまを信じています。R君のおばあさんは、おっしゃいました。

「孫たちのことは、何かある時でもない時でも、毎日、祈って、祈って、送り出しています。ですから、祈った結果、どのような悪いことが起きたとしても、それには何か、意味があると信じています。この30年間、何もできない者が、こうして座って祈りつづけて、そして、その祈りをひとつひとつ、確かに、イエスさまは聞いてくださいました。どこへも出かけて行けなくても、祈りの結ぶ実を見せていただけました。私たちは愛されています。」

「そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」(ヨハネ 8・32)

子どもたちの写真や エピソード、お待ちしてます!!

原稿募集 各地で日曜学校のお世話をされている方々、また子育て奮闘中の皆様からの原稿をお待ちしています。(子どものプライバシー保護の意味合いも含めて、基本的に執筆者、エピソード提供者の名前は載せません。)子どもたちの、ふとしたつぶやきから教えられたこと、ドキッとさせられたこと、思わず吹き出してしまうような、ユーモラスなエピソードなど、お寄せください。なお、紙面の都合上、編集して一部を掲載させていただくこと、全員分をご紹介できないこともありますが、ご了承ください。

送付先 181-0005 三鷹市中原3-1-55 清水洋一
e-mail :yoichimoyota@yahoo.co.jp



KAKUCHI NO SYUKAI KARA

各地の集会から

from OKINAWA

こちら沖縄集会で～す

皆さん、こんにちは。南国沖縄からご挨拶します。まず写真をご覧ください。広々した会場とたくさんの笑顔。今の沖縄キリスト集会の姿です。

この集会場は8年前に与えられた2階建ての建物で、1階を倉庫（主に本の収納）と子どもの遊び場に、2階を集会用に使っています。2階は床面積287平方メートル、150人はゆうに入れる広さです。駐車スペースもたっぷりあります。地理的にも沖縄本島の中部に位置して、県内のどこからも集いやすい所です。本当に神さまからの大きなプレゼント、この上ない恵みと祝福です。

恵みと言えば、ドイツのキリスト集会の方々が、よく沖縄に来てくださることも感謝です。ベックさんの母国ドイツとの間には長年、主イエス様にある交流が続いていますが、訪日するドイツのグループは、観光を兼ねて沖縄のバイブル・キャンプ（よろこびの集い）に参加されることが多いのです。彼らの真っ直ぐな信仰は、言葉の壁を超えて伝わってきますし、年々、顔見知りの方が増え、親交が深まっているのはうれしいことです。

次に日常の活動についてお話しますと、日曜日の礼拝・福音集会には、10代の若者から80代の婦人まで、60人前後の方々が毎週、集っています。集会は、南国らしく明るく、ざっくばらんな雰囲気です。最近は若い年齢層が多くなってきていますので、明るさに活気が増し加わることを期待しています。礼拝と福音集会は沖縄本島以外に、石垣島と宮古島でも持たれています。

残念なのは、新しく集う人がいる一方で、離れていく人もいることです。このため、差し引きで人数はあまり増えません。せっかくの広い集会場が、もっと多くの人で満たされること、これが一つの願いであり、課題です。

日曜以外には木曜日に祈り会が午後8時から10時ごろまで持たれます。初めに男性信者による聖書の学びがあり、祈りの課題を出し合った後、男女に分かれて祈っています。

家庭集会は月に3回ほど、東京などからメッセンジャー（福音集会で聖書のみことばを取り次いでくださる方）が来られる土曜日に開いています。喜屋武昌信さん、平良昌弘さん、大城文靖さん、R・スラッシャーさんの4軒のお宅が場所を提供してくださっています。

沖縄にキリスト集会の種が蒔かれたのは1985年、大城紀美子さんの家にベックさんらが来られて、集会を持ったのが始まりでした。当初は女性ばかり数人の小さい集まりで、「男性の信者を与えてください」と祈ったこともあったそうです。定まった場所がなく、転々としながら集会を持ち続け、1988年4月に首里城の近くに集会所が与えられたものの、手狭になって場所を変えるなど、集会所にはずいぶん苦労しました。それだけに今の施設をありがたく思っています。沖縄に来られる折には、ぜひお立ち寄りください。（崎浜秀安）

私はいつも、私の前に主を置いた。
主が私の右におられるので、
私はゆるぐことがない。（詩編 16・8）


3/21 竹本 真一郎・加奈子


10/19 平山 哲也・愛


11/2 青柳 篤・あづさ


3/9
高橋 英治・純子

11/4
梅田 勝・千穂



結婚式 Wedding


12/15 平良 啓・瑞枝


12/4 津波 隆之・倫子


11/30 中井 孝尚・百香

結婚・葬儀のご報告









祝宴の家に行くよりは、喪中の家に行くほうがよい。
そこには、すべての人の終わりがあり、
生きている者が それを心に留めるようになるからだ。（伝道者の書 7・2）

Funeral 葬儀





10/14 鈴木 よ志ゑ
10/16 竹本 愛子
10/20 五井 カヨ
10/20 袴田 好美
10/21 小竿 裕美
10/24 池田 康
10/25 北嶋 正視
10/25 嶋﨑 辰蔵
11/12 水田 朋子
12/3 加藤 京子
12/17 伊野 朱美
12/23 井上 勝己
12/27 吉田 和生
1/27 平福 一郎

イエス様に感謝する 一つの詩を紹介しましょう。

昨年来日したドイツ・ベテスダ姉妹会の方々が配られた「みことばカード」に添えられた詩です。



主ご自身があなたの先に進まれる。
主があなたとともにおられる。
主は あなたを見放さず、
あなたを見捨てない。（申命記 31・8）

永遠なる主に 感謝することを忘れるな。
主は あなたのために 良いことをたくさんされた。
思い起こせ、主は イエス様にあってあなたを赦して下さり、
あなたは そのままで 主に近づいてよい。

恵み深く、忍耐強く、憐れみ深く、主はあられる、
父親が そうであるよりも、はるかに。
主は 私たちの罪を 最も遠い海に 投げ込まれた。
来て祈れ、この永遠なるお方に。

最も暗い夜にあっても、主は 信頼できるお方。
すべてが 失われたように 思えるときも、
主は あなたを 愛しておられる。たとえ
あなたが 主を 悲しませたとしても、
主は あなたが 思っているよりも 近くにおられる。

感謝すると 人生に 新しいことが 起きる。
かつて 経験したことのない 願いが 生じる。
だれもが、あなたのように 神の子であってほしいと
父から 相続人と 呼ばれるように、と。

恵み深く、忍耐強く、憐れみ深く、主はあられる、
父親が そうであるよりも、はるかに。
主は 私たちの罪を 最も遠い海に 投げ込まれた。
来て祈れ、この永遠なるお方に。

（久田 倫子 訳）



桃のシュトロイセル・クーヘン
Streuselkuchen mit Pfirsiche

道具

天板 … 28cm×28cm 程度
（丸型や、マドレーヌ型でも応用できる）
クッキングシート、 カード

作り方

《下準備》 a. 小麦粉はふるいにかけておく
生地用はベーキングパウダーとあわせて）
b. 桃は、缶から出し水気を切り、スライスする
c. オーブンのスイッチを入れておく（180度 予熱）

《シュトロイセルを作る》
小麦粉と砂糖とバターを
フォークで混ぜる



1. 小麦粉と砂糖をさっと混ぜ合わせ、冷えたバターを加える。フォークで粉の上のバターを端からつぶすように混ぜる



2. すべてのバターと粉が混ざり細かい固まりがあるようなポロポロとした状態になったら冷蔵庫に入れて冷やしておく

《生地を作る》



3. 常温でやわらかくなったバターを泡立て器で練る



4. 砂糖を数回に分けて入れ、良く混ぜる
ポイント この段階でふっくら白っぽくなるまで丁寧に混ぜる



5. 卵を1個ずつ入れ混ぜる

6. 塩をひとつまみ入れる。





7. ふるっておいた小麦粉とベーキングパウダーを数回に分けて入れ、角が立つまで混ぜ合わせる

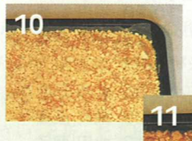
《形にして焼く》



8. 天板にクッキングシートを敷き生地をのせてカードで均等にのばす



9. 生地にスライスしておいた桃を並べる



10. その上から冷やしておいたシュトロイセルをまんべんなくのせる



11. 180℃で35分くらい焼く
表面のシュトロイセルがきつね色になったら竹串を刺して確認する
ポイント 時間は、型やオーブンによって異なります。竹串をさして生地が付いてこなければ大丈夫

出来上がり

少し冷ましてから
適当な大きさに切り分ける

あまったシュトロイセルは
冷凍保存が可能です。





ビッキーのケーキづくり

上はサクッ… 中はしっとり。
中身は色々、天板で作る簡単ケーキ。

あなたは自家製のケーキとお店で買うケーキのどちらを多く食べますか。私の母国では、北ドイツの人は買ったケーキを、南ドイツの人は家で焼いたものを口にすることが多い、という地域差があるようです。母が育ったのは南の方ですが、とにかく、よくケーキを焼くそうです。クリスマスやイースター、結婚記念日、誕生日などの特別な日はもちろん、日曜日（聖日）ごとに焼いていた、と聞きました。ですから、ふだんは、あまり手のかからないケーキになります。

今回紹介する「桃のシュトロイセル・クーヘン」も、そのような、比較的簡単にできるケーキです。生地の上に缶詰の桃（ピーチ）のスライスを並べ、その上にシュトロイセルを乗せて焼けば出来上がりです。シュトロイセルとは粉、砂糖、バターが混ざった粒々（そぼろ状）のものです。桃は白桃、黄桃のどちらでもいいですし、桃の代わりにパイナップル、チェリー、りんごなどを使ってもかまいません。りんご以外は水分が多いので、すべて缶詰の果物を用います。たくさんの方が参加する家庭集会などに向いているケーキと言えるでしょう。

材料

《シュトロイセル用のバター
以外は常温にしておく》

シュトロイセル
- 小麦粉 75g
- 砂糖 40g
- バター（有塩で良い） 50g
  - ※ 冷えたものを使用
  - ※ 固まりのままでなく適当にスライスしておく

生地
- バター（有塩で良い） 75g
- 砂糖 75g
- 卵（全卵・大） 2個
- 小麦粉 125g
- ベーキングパウダー 小 1.5
- 塩 少々

中身
- 桃（缶詰） 400g
  - ※ 好みにより量を加減する

